



令和8年度 J A 山形おきたま

病害虫防除基準

(花 卉)

“安全・安心な『はな』づくり”

栽培履歴の完全記入に取り組みましょう

営農経済部

園芸課	TEL: 46-5302
	FAX: 46-5312
資材課	TEL: 46-5304
	FAX: 46-5311
東部配送C	TEL: 58-0050
	FAX: 57-2015
西部配送C	TEL: 54-0047
	FAX: 54-0048

各地区一次集荷場

米 沢	TEL: 37-2708
	FAX: 37-2678
高 畠	TEL: 58-5060
	FAX: 58-5070
南 陽	TEL: 47-4655
(広域集出荷施設内)	FAX: 47-4654
川 西	TEL: 42-2154
	FAX: 42-6253
長 井	TEL: 88-9790
	FAX: 88-1594
白 鷹	TEL: 85-5159
	FAX: 85-2962
飯 豊	TEL: 74-2138
(アスパラ選果場)	FAX: 74-2138
小 国	TEL: 62-5588
	FAX: 62-2039

目 次

農薬の使用基準のポイント	1
農薬散布をするときは飛散(ドリフト)に注意しましょう!	2
RACコードをご存じですか	3
●花き類登録農薬一覧	4, 5
●樹木類登録農薬一覧	6
●雑草・害虫防除農薬一覧	7
●害獣対策について	8
●花き類耕種的・物理的防除	9
●アルストロメリア	10
●ダリア	11~13
●啓翁桜	14
●トルコギキョウ	15
●ヒマワリ	16
●デルフィニウム	17
●ストック	18
●キク	19, 20
●りんどう	21, 22
花卉栽培履歴書の記入例	23
農薬飛散対策チェックシート記入例	24
花卉栽培履歴書、農薬飛散対策チェックシート	25~28

山形おきたま農業協同組合・J A 全農山形県本部
J A 山形おきたま花卉振興会

◆農薬の使用基準のポイント

農薬を使用して病虫害防除や植物の成長調整等を行なう場合は、容器に記載されている注意事項をよく読み、農作物ごとに定められた使用量、希釈倍数、使用時期、使用回数および同一成分の総使用回数等を厳守し、安全で安心な農作物の生産を心がけましょう。

◇使用方法の遵守

容器のラベルに表示されている内容を守って使用します。

- ① その農薬に適用がない作物へは使用しないこと。
- ② 定められた使用量又は濃度を超えて使用しないこと。
- ③ 定められた使用時期を守ること。
- ④ 定められた総使用回数以内で使用すること。

★新しい農薬はもちろん、使い慣れた農薬でも、変更がある場合があるので、使用前に必ずラベルを確認しましょう。



◇防除記録の記帳

各作物ごとの栽培履歴に農薬を使用した内容を正確に記帳します。記帳した内容は、農薬を安全・適正に使用したこととの証明となります。

◇農薬と農作物に関連する法律

農薬には、殺虫剤、殺菌剤、除草剤、植物成長調節剤、殺そ剤、忌避剤、展着剤、天敵昆虫があります。

【農薬取締法】(農水省)

農薬の製造、輸入、販売、使用などについて規制します。

【食品衛生法】(厚生労働省)

飲食に起因する衛生上の危害の発生を防止します。

このほかに、毒物劇物取締法、植物防疫法、環境基本法、水質汚濁防止法、消防法、水道法などがあり、全てを遵守する必要があります。



注意!

※必ず適用作物・対象病虫害・使用方法・使用時期・希釈倍数・使用量・使用回数を確認して農薬を使用して下さい。

農薬散布をするときには飛散(ドリフト)に注意しましょう！

残留農薬のポジティブリスト制度

▼食品衛生法・残留農薬のポジティブリスト制度によって、残留農薬基準値がない農薬にも 0.01ppm という低い数値が基準値として設定されています。

▼この基準値をオーバーした生産物は販売が禁止されるため、出荷停止・回収などの事態が想定されます。

つまり、最大限に気をつけなくてはならないのは **農薬の飛散** です。

どんなときに注意が必要？

使用しようとする農薬が周りの食用作物に登録（適用）のない場合 特に次の場合に注意が必要です！

1. 圃場同士の距離が近い時 2. 隣の食用作物の収穫が近づいてきた時 3. 飛散が起こりやすい散布方法の時

※風が強いほど飛散距離は大きくなります。 ※散布圃場に近い場所ほど飛散量は多くなります。

※飛散が多くなる傾向があるのは ・細かすぎる散布粒子のノズルを使う場合 ・散布圧力を上げすぎる場合

◆散布することを周りの栽培者に伝え、日頃からコミュニケーションをとるなど、地域の農業者同士の連絡を密にしておくことが重要です。

対策は？ 散布時に守りたいこと！

◎散布量が多くなりすぎないように気をつけましょう。 →散布は必要最小限の量と区域で行うようにしましょう。

◎風の弱い時に風向に気をつけて散布しましょう。 →風下に別の作物がある時はとくに注意が必要です。

◎散布の方向や位置に気をつけて散布しましょう。 →できるだけ作物の近くから、作物だけにかかるよう散布しましょう。 →圃場の端部での散布は外側から内側に向けて行うようにしましょう。

◎細かすぎる散布粒子のノズルは使わないようにし、散布圧力を上げすぎないようにしましょう。

→粒子が細かいほど、圧力を高めるほど飛散しやすくなります。

◎タンクやホースは毎日、洗いもれがないようきれいに洗っておきましょう。

こんな対策も有効！

◎周りの作物にも登録のある農薬を使用する。

◎飛散しにくい剤型（粒剤等）の農薬を使用する。

◎まわりの作物をネットやシートなどで遮へいしたり一時的に覆う。

◆飛散をできるだけ減らすよう工夫して散布しましょう。また、農薬を散布したら必ず記帳するようにしましょう。

花き類登録農薬一覧①

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
は種又は植付前	苗立枯病 (リゾクトニア菌)	ガスタート微粒剤(劇)	8F	土壌混和	30kg/10a	1回	株腐病、球根腐敗病、首腐病、半身萎凋病、萎凋病、萎黄病、白絹病、立枯病、根頭がんしゅ病、ネコフセンチュウ、青枯病、一年生雑草にも適用あり。
発病前～発病初期	立枯病・苗立枯病 茎腐病	オソサイト水和剤80	M4	散布	600倍	8回以内	保護殺菌剤
定植前	立枯病 (リゾクトニア菌)	リゾレックス粉剤	14	土壌混和	50kg/10a	1回	浸透性殺菌剤 トルコホスチルを含む農薬(リゾレックス粉剤、リゾレックス水和剤)の総使用回数は5回以内とする。リゾレックス水和剤は株腐病、茎腐病、白絹病(株元灌注)にも適用あり。
生育期		リゾレックス水和剤	14	土壌灌注	500倍	5回以内	
定植時又は生育期		ユニフォーム粒剤	11 4	土壌表面 散布	18kg/10a	3回以内	トルコギキョウは定植時に1回のみ斑点病で適用があるが、立枯病には適用が無い。 アゾキストDピンを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 メタキシル及びメタキシルMを含む農薬の総使用回数は4回以内(但し、生育期は3回以内)とする。
—	菌核病	トップシンM水和剤	1	散布	1,500倍	5回以内	浸透性殺菌剤 チオファネートメチルを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。特に連用を避ける。
—	白絹病	モンカットフロアブル40	7	株元散布	1,000倍	3回以内	浸透性殺菌剤 フルトラールを含む農薬の総使用回数は3回以内とする。
発病前～発病初期	うどんこ病	ダニコール1000	M5	散布	1,000倍	6回以内	保護殺菌剤。チュウリップ、ゆり、りんどうはうどんこ病に適用が無い。チュウリップは褐色斑点病、ゆりは葉枯病・斑点病、りんどうは褐斑病・葉枯病で適用がある。
発病初期		アンピルフロアブル	3	散布	1,000倍	7回以内	浸透性殺菌剤 ステロル生合成阻害剤(RACコード 3)は耐性リスクが高いため、他剤と併せて総使用回数は2回以内とする。
発病初期		カリクリーン	NC	散布	800倍	—	浸透性殺菌剤
発生初期		サンヨール	M1	散布	500倍	8回以内	保護殺菌剤 灰色かび病、アブラムシ類、ハダニ類にも適用あり。ただし、ヘチマ、ハンジ、スターチス、プリムラは開花前までの適用。
—		ハンチョTF顆粒水和剤	U6、3	散布	2,000倍	2回以内	ステロル生合成阻害剤(RACコード 3)は耐性リスクが高いため、他剤と併せて総使用回数は2回以内とする。
発病前～発病初期		ショウチノスケフロアブル	U13、9	散布	2,000倍	2回以内	新規有効成分フルチアールとマニピリムの混合剤。マニピリムを含む農薬(ショウチノスケフロアブルとルビカフロアブル)の総使用回数は5回以内とする。
発病初期		ホリオキシAL水溶剤	19	散布	2,500倍	8回以内	浸透性殺菌剤 予防効果に優れる。黒斑病、灰色かび病にも適用あり。ハダニ類、アザミウマ類には発生初期に適用あり。
発病前～発病初期		灰色かび病	セイビアーフロアブル20	12	散布	1,000倍	4回以内
発病初期	アフェットフロアブル		7	散布	2,000倍	3回以内	うどんこ病にも適用あり。 浸透性殺菌剤、耐性菌防止のため使用回数は2回までとする。
発病初期	フルビカフロアブル		9	散布	2,000倍	5回以内	保護殺菌剤 高温時に葉害の恐れがあるので注意する。マニピリムを含む農薬(ショウチノスケフロアブルとルビカフロアブル)の総使用回数は5回以内とする。
—	ケッター水和剤		1、10	散布	1,000倍	5回以内	浸透性殺菌剤 予防効果に優れる。 チオファネートメチルを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。特に連用を避ける。
発病前～発病初期	ホトキラー水和剤		BM2	ダクト内投入	15g/10a (1日あたり)	—	発病前に使用する。 毎日継続して投入する。
定植時	カブラヤガ	カルホス微粒剤F(劇)	1B	作条処理 土壌混和	6kg/10a	1回	定植時にイネキサチオンを含む農薬の総使用回数は1回以内とする。
生育初期	ネキリムシ類	ガードハイトA	3A	株元散布	3kg/10a	6回以内	
発生初期	アブラムシ類	マラソン乳剤	1B	散布	2,000倍	6回以内	ハダニ類にも適用あり。
発生初期		コルト顆粒水和剤	9B	散布	4,000倍	4回以内	コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
発生初期		スタークル顆粒水溶剤	4A	散布	2,000倍	5回以内	コナジラミ類にも適用あり。ハモグリハエ類には1,000倍(灌注1L/㎡)で適用あり。
発生初期		オ尔特ラン水和剤	1B	散布	1,000倍	5回以内	アザミウマ類、ヨウムシ類、アオムシにも適用あり。アセフトを含む農薬(オ尔特ラン水和剤とオ尔特ラン粒剤)の総使用回数は5回以内とする。
—		ロディー乳剤(劇)	3A	散布	1,000倍	6回以内	ハダニ類にも適用あり。合成ピレスロイド系(RACコード 3A)殺虫剤は、抵抗性害虫出現防止のため連用は避け総使用回数は2回以内とする。
発生初期		オ尔特ラン粒剤	1B	株元散布	6kg/10a	5回以内	アザミウマ類、ヨウムシ類にも適用あり。アセフト(オ尔特ラン水和剤とオ尔特ラン粒剤)を含む農薬の総使用回数は5回以内とする。たてあいは定植時アブラムシ類のみ。
生育期		アトマイヤー1粒剤	4A	株元散布	2g/株 6kg/10a以内	5回以内	ミダケアブラムシを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。 きく類のみ施設限定。
発生初期		モスピランシエット(劇)	4A	くん煙	50g/400m³	5回以内	アセフトを含む農薬(モスピランシエットとモスピラン顆粒水和剤)の総使用回数は5回以内とする。温室、ビニールハウス等の密閉できる場所で使用できる。
発生初期	アザミウマ類	カウンター乳剤	15	散布	2,000倍	5回以内	
発生初期		モスピラン顆粒水溶剤(劇)	4A	散布	2,000倍	5回以内	アブラムシ類にも適用あり。 アセフトを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。
発生初期		スピノース顆粒水和剤	5	散布	5,000倍	2回以内	施設栽培のみ使用可
発生初期		ハチハチフロアブル(劇)	39、21A	散布	1,000倍	4回以内	
発生初期	オンシツコナジラミ 若齢幼虫	カルホス乳剤(劇)	1B	散布	1,000倍	4回以内	シラミ及びアシアナムを除く。イネキサチオンを含む農薬の総使用回数は4回以内とする。(カルホス微粒剤Fを定植時に使用した場合には3回以内とする)

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

花き類登録農薬一覧②

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注 意 事 項
発生初期	コナジラミ類	フェス顆粒水和剤	9B	散布	5,000倍	4回以内	アブラムシ類にも適用あり。
発生初期		ベストガード水溶剤	4A	散布	1,000倍	4回以内	アブラムシ類にも適用あり。 ニテンピラムを含む農薬の総使用回数は4回以内とする。
栽培期間中		ラノーテープ	7C	作物体の 付近に設置	50㎡/10a	1回	施設栽培のみ使用可
発生初期	ハモグリバエ類	アクタラ顆粒水溶剤	4A	散布	2,000倍	6回以内	ミカンキロアザミウマには1,000倍で適用あり。
発生初期		アフーム乳剤	6	散布	1,000倍	5回以内	オオタバコガ、ヨトウムシ類にも適用あり。アザミウマ類には2,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可。
発生初期	マメハモグリバエ	トリガード液剤	17	散布	1,000倍	4回以内	クロハネキノコバエ類に土壌灌注:1,000倍、2L/㎡使用回数1回で適用あり。
発生初期	ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	15	散布	2,000倍	2回以内	高温時の散布を避ける。
発生初期		アディオン乳剤	3A	散布	2,000倍	6回以内	カメムシ類、ハマキムシ類、アブラムシ類にも適用あり。合成ピレスロイド剤(RACコード 3A)は、抵抗性害虫出現防止のため連用は避け総使用回数は2回以内とする。
発生初期		コテツフロアブル(劇)	13	散布	2,000倍	2回以内	ハダニ類、ミカンキロアザミウマにも適用あり。
発生初期	ハスモンヨトウ	マッチ乳剤	15	散布	2,000倍	5回以内	
発生初期	オオタバコガ	アクセルフロアブル	22B	散布	1,000倍	6回以内	
発生初期		プレオフロアブル	UN	散布	1,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
発生初期		フェニックス顆粒水和剤	28	散布	2,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
発生初期		ディアナSC	5	散布	2,500倍	2回以内	コナジラミ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類、クロハネキノコバエ類にも適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意。
—	バッタ類 ハマキムシ類	スミチオン乳剤	1B	散布	1,000倍	6回以内	アオムシ、アザミウマ類にも適用あり。
発生初期	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	21A	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
—		カネマイトフロアブル	20B	散布	1,000倍	1回	ばらを除く。デルフィニウムではシクラメンホコリダニにも適用あり。卵・幼虫・成虫に効果がある。
発生初期		ハロックフロアブル	10B	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
発生初期		ダニサラハフロアブル	25A	散布	1,000倍	2回以内	卵・幼虫・成虫に効果がある。
発生初期		アクリメック(劇)	6	散布	500倍	5回以内	アザミウマ類にも適用あり。
発生初期		エコピタ液剤	—	散布	100倍	—	うどんこ病、アブラムシ類、コナジラミ類にも適用あり。幼虫・成虫に効果がある。
—		サンクリスタル乳剤	—	散布	600倍	—	発生初期に使用。うどんこ病にも適用あり。展着剤不要。

- ※ 薬剤を対象病害虫ごとに剤型で整理しています。農薬の総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。
- ※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。
- ※ 薬剤の使用にあたり薬害がないかどうか細心の注意を払って使用して下さい。事前に散布試験をし、薬害の有無を確認してから散布を行って下さい。
- ※ 殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。 ※ ラノーテープの使用については園芸担当者に相談して下さい。

◆交信かく乱剤

使用時期	適用病害虫	薬剤名	農薬の成分系	設置量	使用目的	使用方法
対象作物の栽培全期間	コナガオオタバコガ ヨトウガ	コナガコンープラス	その他	100~120本/10a (22g/100本製剤)	交尾阻害	作物の生育に支障のない高さに支持棒等を立て、支持棒にディスプレイを巻き付け固定し圃場に配置する。

- ※ 急傾斜地、風の強い地帯等、剤の濃度を維持するのが困難な地域では使用しない。
- ※ 対象害虫以外の害虫には効果がないため、登録薬剤を併用し慣行防除を行う。
- ※ コナガコンープラス使用については園芸担当者に相談して下さい。

◆展着剤(主に、水和剤・フロアブル剤に加用する。)

薬剤名	使用量(希釈倍数)	説 明
アプローチBI	10ml / 散布液10ℓ(1,000倍)	湿展性(付着性)・浸透性・濡れ性(均一性)があり、治療型殺菌剤への加用効果が大きい。薬剤を均一に付着・浸透させ、汚れを軽減。他剤に比べ高濃度で使用する機能性展着剤。
ハイテンパワー	2ml / 散布液10ℓ(5,000倍)	湿展性(付着性)・浸透性に優れ、泡立ち少ない。乳化、可溶化が主で洗浄作用が強い。そのため固着性(耐雨性)は劣る。

※ 展着剤を加用する際の混用の順序: 展着剤希釈液を調製した後、他剤を加えて混合希釈液を調製する。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

樹木類登録農薬一覧

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
発生初期	うどんこ病	サンヨール	M1	散布	500倍	8回以内	保護殺菌剤
発病初期		トップシンM水和剤	1	散布	1,000倍	5回以内	浸透性殺菌剤。特に連用を避ける。炭疽病、ごま色斑点病、輪紋葉枯病、斑点症にも適用あり。
発病初期		トリフミン水和剤	3	散布	3,000倍	5回以内	DMI剤(RACコード 3)は耐性菌発生防止のため2回以内とする。
発病初期		フルピカフロアブル	9	散布	2,000倍	5回以内	保護殺菌剤 高温時に葉害の恐れがあるので注意する。メパニピリムを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。灰色かび病にも適用あり。
発病前～ 発病初期		ショウチノスケフロアブル	U13、9	散布	2,000倍	2回以内	新規有効成分フルチアニルとメパニピリムとの混合剤。メパニピリムを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。
発病初期	炭疽病	ペンコセブ水和剤	UN、M3	散布	600倍	4回以内	斑点症、枝枯細菌病(新梢伸長期～発病初期)にも適用あり。
発病初期		ヘルコート水和剤	M7	散布	1,000倍	3回以内	イミダジンを含む農薬の総使用回数は3回以内とする。
新梢伸長期～ 発病初期	枝枯細菌病	マイコシールド	41	散布	1,000倍	5回以内	
発病初期	斑点症	Zホルター	M1	散布	800倍	—	輪紋葉枯病(500倍)にも適用あり。
発生初期	カイガラムシ類 (幼虫)	アフロートフロアブル	16	散布	1,000倍	6回以内	カイガラムシ類の発生が見られる園で積雪等により発芽前の防除ができなかった場合には、融雪後から4月中旬頃までに散布する。
発生初期	カイガラムシ類	カルホス乳剤(劇)	1B	散布	1,000倍	6回以内	カイガラムシ類の発生がみられる園地で、歩行性幼虫の発生が確認されたら防除を実施する。ケムシ類にも適用あり。
発生初期		マツクリン液剤2	4A	散布	250倍	5回以内	アセタズピットを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。ケムシ類にも適用あり。アブラムシ類(500倍)適用あり。
—		アタックオイル	UNM、NC	散布	100倍	—	発芽後の散布は葉害が発生する恐れがあるので注意する。
幼虫発生期	ケムシ類	トレホン乳剤	3A	散布	4,000倍	6回以内	シャクトリムシ類にも登録あり。オヒカハ(2,000倍)にも適用あり。合成ピレスロイド系殺虫剤(RACコード 3A)は抵抗性害虫出現防止のため総使用回数は2回以内とする。
発生初期		スタークル 顆粒水溶剤	4A	散布	2,000倍	5回以内	
発生初期		アクセルフロアブル	22B	散布	1,000倍	6回以内	
発生初期	ハマキムシ類	ディアナSC	5	散布	2,500倍	2回以内	
—	アブラムシ類	スミチオン乳剤	1B	散布	1,000倍	6回以内	ゲンバイムシ類、フラーパラゾウムシ、アメリカシロヒトリにも適用あり。オオハリセンチュウは移植前 30分間根部浸漬 500倍1回で適用あり。
発生初期	ゲンバイムシ類	モスピラン 顆粒水溶剤(劇)	4A	散布	2,000倍	5回以内	アセタズピットを含む農薬の総使用回数は5回以内とする。まつはゲンバイムシ類に適用無く、アブラムシ類4,000倍で適用あり。
発生初期	アザミウマ類	オルトラン水和剤	1B	散布	1,000倍	5回以内	
発生初期	シャクトリムシ類	パダンSG 水溶剤(劇)	14	散布	1,500倍	3回以内	

※ 薬剤を対象病害虫ごとに剤型で整理しています。農薬の総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※ 薬剤の使用にあたり葉害がないかどうか細心の注意を払って使用して下さい。事前に散布試験をし、葉害の有無を確認してから散布を行って下さい。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

雑草・害虫(ナメクジ類・カタツムリ類)防除農薬一覧

JA山形おきたま花卉振興会

◆雑草の防除

耕種的・物理的防除

- は種(定植)前に間隔をあけて2回耕起することにより雑草の発生を軽減できる。これは、1度軽く耕起することで一斉に雑草を発芽させ、これをは種前にもう一度耕起してすき込む方法である。
- 水田転作畑では、いったん水田に戻し田畑輪換を行う。
- 中耕(培土)を行う。
- 土壌の蒸気消毒や太陽熱消毒を行う。
- マルチ栽培を導入し、畝間に防草シートを設置する。

花きに除草剤を使用する場合の一般的留意事項

- 薬量並びに散布面積は正確に秤量、測定する。
- 除草剤をうすめる水の量は、容器のラベルをよく確認し、表示より濃い濃度、多量で使用しないよう適正な水量で散布する。
- 散布機具及び容器は専用のものを使用し、使用後は石鹼水で十分洗う。
- 薬効は土壌水分との関連が深く、乾燥状態では効果が低い。散布直後の降雨は、除草効果を低くするばかりではなく、薬害を起こす危険性もあるので、降雨が予想される場合は使用を避ける。
- 現在の除草剤だけでは、完全な除草効果は期待できないので、中耕土寄せ、敷ワラ、ポリマルチ等、総合的な対策を行うことが重要である。
- 土壌散布後3~4週間は土壌をかくはんしない方が効果期間が長い。
- 水田転作畑での使用は、土塊をよく砕き、土壌表面を均一にする。
- 催芽種子をは種した場合は、薬害の恐れがあるので、除草剤の使用は避ける。
- 散布に使用した器具及び容器を洗った水や残液は、川や池等に流入しないよう注意する。
- ハウス内での除草剤の使用は薬害が発生しやすいので避ける。

薬剤による防除

作物名	除草剤名(有効成分)	HRACコード	適用雑草名	使用時期	使用方法	使用量/散布液量(10a当たり)	使用回数	注意事項
花き類・観葉植物	ブリグロックSL(毒) (ジクワット・パラコート)	22	1年生雑草	畦間処理:雑草生育期(草丈20cm以下)	雑草茎葉散布	600~1,000mL/100~150L	3回以内	作物に飛散しないよう注意する。非選択性接触型茎葉処理除草剤で、イオンの力で、雑草の細胞を破壊する。展着剤を加用する場合は非イオン系展着剤を使用する。
樹木類			雑草生育期(草丈30cm以下)					
花き類・観葉植物	ラウンドアップマックスロード (グリホサートカリウム塩)	9	1年生雑草	耕起前まで(雑草生育期)	雑草茎葉散布	200~500mL/50~100L	2回以内	(少量散布の場合) 200~500mL/25~50L/10a
樹木類			多年生雑草	雑草生育期	雑草茎葉散布	500~1,000mL/50~100L	4回以内	作物に飛散しないよう注意する。(少量散布の場合) 1年生雑草:200~500mL/5~50L/10a 多年生雑草500~1000mL/5~50L/10a スギナ:1500~2000mL/25~50L/10a
			スギナ			1,500~2,000mL/50~100L		
花き類・観葉植物	バスタ液剤 (グルホシネート)	10	1年生雑草	雑草生育期	雑草茎葉散布	300~500mL/100~150L	3回以内	作物に飛散しないよう注意する。サクサ液剤とバスタ液剤は合わせて3回以内
花き類・観葉植物	ザクサ液剤 (グルホシネートPナトリウム塩)	10	1年生雑草	雑草生育期畦間処理	雑草茎葉散布	300~500mL/100~150L		
樹木類			雑草生育期					
きりょう	ナブ乳剤 (セトキシジム)	1	1年生イネ科雑草(スズメカサネを除く)	雑草生育期	雑草茎葉散布又は全面散布	150~200mL/100~150L	3回以内	遅効性で枯死するまでに5~10日必要。広葉雑草及びスズメカサネには効果がない。また、イネ科作物には薬害があるので飛散しないよう注意する。
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン)	3	1年生雑草	キク定植前 りょう萌芽前 (雑草発生前)	全面土壌散布	200~400mL/70~150L	1回	キク科雑草とツクサには効果が劣る。
樹木類	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン)	3		植付後・生育期(雑草発生前)	畦間・株間土壌散布	4~5kg/10a	2回以内	トレファノサイド乳剤と合わせて2回以内
ひまわり	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン)	3	1年生雑草(ツクサ科、カタツムリ科、キク科、アラナ科を除く)	は種後出芽前	全面土壌散布	200~300mL/100L	1回	施設栽培では使用しない(ひまわりのみ)。
ゆり				植付後~萌芽前	全面土壌散布		1回	
チューリップ				定植後	畦間土壌散布		1回	
シャクヤク				植付後・生育期(雑草発生前)	畦間・株間土壌散布		2回以内	トレファノサイド粒剤2.5と合わせて2回以内
き(露地栽培)				は種直後	全面土壌散布		1回	施設園芸では使用しない。

◆ナメクジ類・カタツムリ類の防除

耕種的・物理的防除

- 湿潤な場所に発生が多いので、ほ場の排水を良くし、ほ場の環境を改善する。
- 餌となる作物残さや雑草などをほ場内から除去し、清潔にする。
- 石灰の不足した酸性土壌に発生が多いので、定植前に石灰資材を施用し、中性からやや酸性の土壌に改良する。
- 施設栽培では、夏期に太陽熱消毒を行うことによりハウス内のナメクジ類を完全に防除できる。※太陽熱消毒方法についてP7を参照

薬剤による防除

適用病害虫	農薬名	区分	使用量	適用品	使用回数	使用方法
カタツムリ類	マイキラー	劇	100~200倍 100~300L/10a	花き類・観葉植物栽培温室等の生息地。ほ場周辺雑草地の生息地	6回以内	作物にかからないように土壌表面散布する。
ナメクジ類	スラゴ		1~5g/m ²	温室、ハウス、圃場、花壇	—	発生初期。ナメクジ類及びカタツムリ類の発生あるいは加害を受けた場所または株元に配置する。

※ 注意事項 連続降雨などで多量に水分を含むと効果が落ちるので、晴れ間を狙って防除する。【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

令和8年度 害獣（野そ・モグラ・イノシシ）対策について

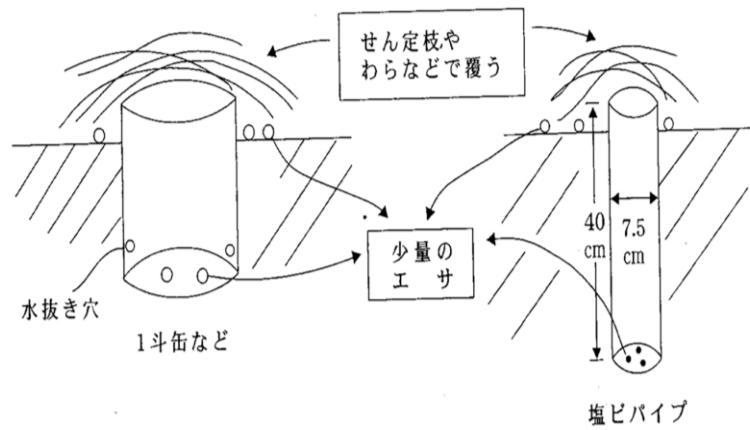
JA山形おきたま花卉振興会

◆野その防除

耕種的・物理的防除

秋季（根雪前）、春季、夏季に、

- 野そが侵入・定着しないよう、ほ場や周辺の清掃・除草や隠れ場所となるような資材の撤去を行う。
- 野その増殖を抑制するため、ほ場内に餌となる農作物残渣（りんどうの茎葉など）を残さない。
- 「ネズミとり器」や「粘着板」を利用する。この際、野そは暗所を好むこと、また壁などに沿って移動する習性を利用し、「ネズミとり器」は壁面に肥料袋などで覆って設置する。また、「ネズミとり器」を設置後数日は、「ネズミとり器」の周辺に餌をまき警戒心を与えないように配慮する。
- 簡易なトラップを利用した駆除も周年駆除法として有効。
10a当たり5～6か所に、1斗缶や、塩ビパイプ（直径7.5cm×40cm）等を上部1～2cm残して地中に埋め、上部の穴をせん定枝やわらで広く覆い、時々捕殺を確認する。（下図参照）



ハウス内作物の野そ対策

- 野そが侵入・定着しないよう、ハウス内には隠れ場所となるような資材を置かない。
- ハウスの外縁部は内側、外側とも踏み固めておく。
- 野そが侵入した場合は、そ穴や通路（作物の残渣を引き込んだり糞が見られる場所）に金網製の「ネズミとり器」や「粘着板」を置いて捕殺する。
※ 野そは暗い場所に落ち着き、壁などに沿って移動する習性があるため、捕獲器は、壁面に肥料袋などで覆っておく。捕獲器の設置後数日は捕獲器周辺に餌をまいて捕獲器への警戒心を与えないように配慮する。発生が多い場所では、周年設置して被害を防ぐことと、ハウス周辺の環境をきれいにし同時に防除対策も行う。

薬剤による防除 水田、畑地、果樹園、桑園は下記の薬剤により防除する。

- 農作物の少ない秋季および春季の防除を徹底する。
※ ペットや家畜への二次的な危害を防止するため、家畜施設や住宅地周辺では使用しない。

(1) リン化亜鉛粒剤

対象害獣	農薬名	農薬の成分系	使用量	適用場所	使用方法
野そ	強カラテミン (劇)	リン化亜鉛	1～2g(15～30粒)/そ穴1か所	農地 山林	そ穴に1か所あたり1～2g(15～30粒)宛そのままあるいは小袋詰を投入する。

(2) ダイファシン系粒剤

対象害獣	農薬名	農薬の成分系	使用量	適用場所	使用方法
野そ	ヤソチオン (劇)	ダイファシン	200～300g/10a	農地	本剤5gをそのまま、あるいは5gの小袋詰をそ穴に投入するか、野その通路に配置する。

(3) クマリン系剤

対象害獣	農薬名	農薬の成分系	使用量	適用場所	使用方法
野そ	ラットシードF	クマリン	1か所あたり5～100g	農地	そ穴1か所あたり5～10gを投入。もしくはそ穴の近くにベイトボックスを設置し、その中に5～100gを配置する。

◆モグラの防除

耕種的・物理的防除

- 振動を嫌う性質があるので、ほ場のところどころに風車を立て、その振動が地中に伝わるようにする。
- 周囲に深さ1m程度の溝を掘り、ほ場への侵入を防ぐ。
- トンネルの本道に罠を仕掛けて捕殺する。この場合、人のおいがつかないように素手では持たない。

◆イノシシ対策

イノシシを寄せ付けない環境作りと物理的防除

- ほ場周辺や耕作放棄地の除草を定期的に行い、イノシシの隠れ家となるような場所を作らない。
- イノシシの餌となる農作物残渣（収穫残渣や間引いた株など）をほ場内に残さない。
※ 収穫せずに放置された果樹は、イノシシの格好のエサ場となることから、地域の合意の上で可能な限り伐採する。
- 防護柵（電気柵等）を設置し、イノシシの侵入防止に努める。（電気柵は感電防止の為、人が安易に立ち入らない場所に設置し、危険表示板を複数設置する。）

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

花き類耕種的・物理的防除、発生予察に基づく防除

JA山形おきたま花卉振興会

対象病害虫名	防除方法				
病害虫全般	1. ほ場周辺を含め、除草に努める。 2. 連作をしない。				
病害全般	1. 排水対策を徹底する。 2. 施設栽培では、過湿を防ぐため換気を図る。				
立枯病、青枯病などの 土壌病害	1. 土壌を蒸気消毒する。				
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>病害名</th> <th>消毒の方法</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>立枯病、青枯病等の土壌病害</td> <td>60℃で30分間または80℃以上10～15分間均一に行う。 なお、カーネーションでは80℃以上10～15分間とする。</td> </tr> </tbody> </table>	病害名	消毒の方法	立枯病、青枯病等の土壌病害	60℃で30分間または80℃以上10～15分間均一に行う。 なお、カーネーションでは80℃以上10～15分間とする。
	病害名	消毒の方法			
立枯病、青枯病等の土壌病害	60℃で30分間または80℃以上10～15分間均一に行う。 なお、カーネーションでは80℃以上10～15分間とする。				
2. 土壌還元消毒する。次項を参照のこと。					
ハウス土壌還元消毒 (塩類集積改善、連作 障害対策)	1. 有機質資材(10aあたり米ぬか等1,000kg)を施用し、耕土層がよく混ざるように耕うんする。 2. 耕うん後に、かん水チューブを90cm間隔で設置し、透明のビニール等で地表全面を被覆した後に均一になるようかん水し、湛水状態にする。 ※既存のかん水設備のある圃場では、かん水後に被覆してもよい。 3. ハウスを密閉し、『目標地温30℃、20日間』、温度を確保する。還元化が進行している目安として密閉後3～5日でどぶ臭の発生を確認する。 4. 処理後は被覆資材を除去し、乾燥させた後、2～3回の耕うんにより十分な酸化状態に戻す。				
ウイルス ウイロイド病害	1. アザミウマ類、アブラムシ類等を介して感染が拡大するので、殺虫剤の適期防除を心がける。 2. 繁殖用の球根、木子、球芽は健全株から採取する。 3. 施設栽培では出入り口や側面に寒冷紗を張り媒介する昆虫の侵入を防ぐ。 4. 発病株は直ちに抜き取り、圃場外に隔離し焼却する等、適切な処分をする。 5. 発病株に触れた手で健全株に触れない。 6. 汁液により感染するため、収穫に使うハサミは使用のたびに家庭用塩素系漂白剤等の次亜塩素酸ナトリウムに15分浸漬し拭き取る。 ※簡易的な処理方法として液に2分間浸漬後、20秒流水で洗い流して拭き取る方法もある。 ※防護メガネ・マスク・炊事用手袋は必ず着用する。 ※金属製及びメラミン製の容器には入れない。※ハサミの金属が腐食することもあるため注意する。				
ハダニ類	1. ハダニ類の被害は急速に拡大するので、発生初期から適期防除を徹底する。 2. 茎葉への散水によりハダニ類の密度を減らすことが期待出来る。				
オオタバコガ	1. ハウス栽培では、成虫の侵入を防止するため開口部に防虫ネット(5mm目以下)等を設置する。 2. 露地栽培では、圃場に黄色LED等の防蛾灯を設置し、夜間に点灯させると忌避効果がある。 3. 被害部位や収穫残渣は、内部に幼虫が生息している場合があるので適切に処分する。				
チョウ目害虫 アブラムシ類 コナジラミ類 アザミウマ類	◇耕種的・物理的防除 ・施設栽培では、開口部に防虫ネットまたは寒冷紗を張る。 ◇発生予察に基づく防除 ・ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象病害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色、アザミウマ類は青色に誘引される。				
ミカンキイロアザミウマ	◇耕種的・物理的防除 ・施設では成虫の侵入を防止するため開口部に防虫ネット(赤色・白色0.8mm目)または寒冷紗(白色1mm目)を設置する。 ・成虫を絶食状態にすると数日で死滅するので、施設では収穫終了後完全に密閉し、さらに作物及び雑草を枯死させる。 ・露地の発生ほ場では、収穫が終了したら被害植物は適切に処分する。 ・ほ場及びほ場周辺の雑草にも寄生するので、除草を徹底する。 ◇発生予察に基づく防除 ・ほ場内外の作物体付近に粘着トラップを設置、対象病害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類は黄色、アザミウマ類は青色に誘引される。				
土壌線虫	◇ 耕種的防除・物理的防除 ・連作をしない。 ・抵抗性品種を作付けする。 ・ネグサレセンチュウの発生しているほ場では、マリーゴールド(フレンチ種またはアフリカントール)を3ヶ月以上栽培(輪作)し、すき込む。 ・さといもとの輪作でキタネグサレセンチュウの密度を低下させることができる。 ・ネコブセンチュウの発生しているほ場では、マリーゴールド(アフリカントール)やクロタリヤ、ヘイオーツを3ヶ月以上栽培し、すき込む。 ・太陽熱消毒する。				
タネバエ	・魚かす、油かす、米ぬか、牛糞、鶏糞、堆肥等、有機物を施用するとタネバエが発生しやすくなる。特に、未熟なものは完熟したものに比べ発生が多くなる。有機物を施用する場合は、早めに施用してすき込むとともに出芽を促すため碎土を丁寧に行う。				
モグラ	◇耕種的・物理的防除 ・振動を嫌う性質があるので、ほ場のところどころに風車を立て、その振動が地中に伝わるようにする。 ・周囲に深さ1m程度の溝を掘り、ほ場への侵入を防ぐ。 ・トンネルの本道に罠を仕掛けて捕殺する。この場合、人のおいがつかないように罠を素手で持たない。				
ナメクジ類 カタツムリ類	◇耕種的・物理的防除 ・湿潤な場所に発生が多いため、ほ場の排水を良くし、ほ場の環境を改善する。 ・餌となる作物残渣や雑草などをほ場内から除去し、清潔にする。 ・石灰の不足した酸性土壌に発生が多いので、定植前に石灰資材を施用し、中性からやや酸性の土壌に改良する。 ・太陽熱消毒をする。太陽熱消毒とはハウスにおいて7月中旬～8月下旬の夏期高温時を利用して約1カ月高温状態を保ち、土壌中のナメクジなどの生息密度を低下させることができる。また、雑草の防除や土壌病害の抑制にも効果が見られる。				

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

アルストロメリア病害虫防除基準

JA山形おきたまアルストロメリア振興部会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
生育期 発病初期	灰色かび病	アフエットフロアブル	7	散布	2,000倍	3回以内	浸透性殺菌剤、耐性菌防止のため連用を避ける。
		フルピカフロアブル	9	散布	2,000倍	5回以内	予防剤 高温時に葉害の恐れがあるので注意する。
		ゲッター水和剤	1、10	散布	1,000倍	5回以内	予防・治療剤 耐性菌を考慮し連用を避ける。
		ポリオキシシンAL水溶剤	19	散布	2,500倍	8回以内	うどんこ病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
発病前～ 発病初期		ボトキラー水和剤	BM2	ダクト内 投入	15g/10a (1日あたり)	—	予防剤 微生物殺菌剤。 発病前から毎日継続して実施する。
生育期 発生初期	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	9B	散布	4,000倍	4回以内	コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用は避ける。
		スタークル顆粒水溶剤	4A	散布	2,000倍	5回以内	コナジラミ類にも適用あり。ハモグリバエ類には1000倍(灌注1ℓ/m ²)で適用あり。
生育期		ロディー乳剤(劇)	3A	散布	1,000倍	6回以内	合成ピレスロイド剤(RACコード 3A)は抵抗性害虫出現防止のため総使用回数は2回以内とする。ハダニ類にも適用あり。
生育期 発生初期	アザミウマ類	カウンター乳剤	15	散布	2,000倍	5回以内	
		アフーム乳剤	6	散布	2,000倍	5回以内	オオタバコガ、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類には1,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
		ディアナSC	5	散布	2,500倍	2回以内	高温時の散布で花が焼ける葉害が発生する恐れがあるので注意する。オオタバコガ、ハモグリバエ類、コナジラミ類にも適用あり。
生育期 発生初期	ミカンキイロアザミウマ	アクタラ顆粒水溶剤	4A	散布	1,000倍	6回以内	ハモグリバエ類には2000倍で適用あり。
生育期 発生初期	コナジラミ類	チェス顆粒水和剤	9B	散布	5,000倍	4回以内	アブラムシ類にも適用あり。
		ベストガード水溶剤	4A	散布	1,000倍	4回以内	同成分のベストガード粒剤と併せて総使用回数は4回以内とする。アブラムシ類にも適用あり。
		ラーノテープ	7C	作物体の 付近に 設置	50m ² /10a	1回	
生育期 発生初期	オオタバコガ	フェニックス顆粒水和剤	28	散布	2,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
生育期 発生初期	ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	15	散布	2,000倍	2回以内	高温時の散布で花が焼ける葉害が発生する恐れがあるので注意する。
		オルトラン水和剤	1B	散布	1,000倍	5回以内	アザミウマ類、アブラムシ類、アオムシにも適用あり。
		コテツフロアブル(劇)	13	散布	2,000倍	2回以内	ハダニ類、ミカンキイロアザミウマにも適用あり。高温時の散布で花が焼ける葉害が発生する恐れがあるので注意する。
生育期 発生初期	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	21	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		バロックフロアブル	10B	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		ダニサラバフロアブル	25A	散布	1,000倍	2回以内	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		アグリメック(劇)	6	散布	500倍	5回以内	アザミウマ類にも適用あり。
		エコピタ液剤	—	散布	100倍	—	気門封鎖剤 うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。
生育期		サンクリスタル乳剤	—	散布	600倍	—	気門封鎖剤 うどんこ病にも適用あり。 展着剤不要。
生育期	ウイルス病	発病株は早期に抜き取り、適切に処分する。 ※ウイルスは、アブラムシ類・アザミウマ類などの媒介昆虫によって伝搬されるので、それらの防除を徹底する。					発病株に触れた手で健全株に触れない。ハサミ等も同様。ハサミの消毒はビストロン等の第3リン酸ナトリウム液でこまめに行う。

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード 3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。但し、気門封鎖剤(エコピタ液剤、サンクリスタル乳剤)、ボトキラー水和剤は除きます。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。5月末までに防除は必ず行ってください。)

※ラーノテープの使用については園芸担当者に相談して下さい。

◇耕種的・物理的防除 灰色かび病: 多湿条件下で発生しやすいため、密植・茎葉の過繁茂は避ける。施設栽培においては、過湿にならないよう換気を行う。

◇発生予察に基づく防除 ほ場内の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類は黄色に誘引される。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

ダリア病害虫防除基準

JA山形おきたまダリア振興部会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植前	立枯病	リゾレックス粉剤	14	土壌混和	50kg/10a	1回	
定植時	カブラヤガ	カルホス微粒剤F(劇)	1B	作業処理 土壌混和	6kg/10a	1回	本剤を使用した後はカルホス乳剤 使用不可。
生育期 発病前～ 発病初期	立枯病	オーソサイド水和剤80	M4	散布	600倍	8回以内	予防剤 苗木立枯病、茎腐病にも適用あり。
生育期 発病初期	うどんこ病	アンビルフロアブル	3	散布	1,000倍	7回以内	予防剤 DMI剤は耐性リスクがあるため、総使用回数は2回以内とする。
		カリグリーン	NC	散布	800倍	—	予防剤
		サンヨール	M1	散布	500倍	8回以内	予防剤 灰色かび病、アブラムシ類、ハダニ類にも適用あり。
生育期		パンチョTF顆粒水和剤	U6、3	散布	2,000倍	2回以内	DMI剤は耐性リスクがあるため、総使用回数は2回以内とする。
発病前～ 発病初期		ショウチノスケフロアブル	U13、9	散布	2,000倍	2回以内	フルピカフロアブルと合わせて5回以内。
生育期 発病初期		ポリオキシシンAL水溶剤	19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 灰色かび病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
生育期 発病初期	灰色かび病	フルピカフロアブル	9	散布	2,000倍	5回以内	予防剤 高温時に薬害の恐れがあるので注意する。 ショウチノスケフロアブルと合わせて5回以内。
生育期		ゲッター水和剤	1、10	散布	1,000倍	5回以内	予防・治療剤 連用により耐性菌が懸念されるので注意する。
生育期 発病初期	うどんこ病 ハダニ類 アブラムシ類 アザミウマ類	花華やか 顆粒水溶剤	6、3 4A	散布	500倍	5回以内	予防剤 高温時は薬害の恐れあり。 アフーム乳剤と合わせて5回以内。 DMI剤は耐性リスクがあるため、総使用回数は2回以内とする。
生育期 発病初期	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	9B	散布	4,000倍	4回以内	コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
		オルトラン水和剤	1B	散布	1,000倍	5回以内	アザミウマ類、ヨトウムシ類、アオムシにも適用あり。
		アドマイヤーフロアブル(劇)	4A	散布	2,000倍	5回以内	アドマイヤー1粒剤と合わせて5回以内。
生育期		アドマイヤー1粒剤	4A	株元散布	2g/株	5回以内	アドマイヤーフロアブルと合わせて5回以内。 10aあたり6kgまで。
生育期		スミチオン乳剤	1B	散布	1,000倍	6回以内	バッタ類、アオムシにも適用あり。
生育期 発病初期	アザミウマ類	カウンター乳剤	15	散布	2,000倍	5回以内	
		モスピラン顆粒水溶剤(劇)	4A	散布	2,000倍	5回以内	アブラムシ類にも適用あり。
		ハチハチフロアブル(劇)	39、 21A	散布	1,000倍	4回以内	
		アフーム乳剤	6	散布	2,000倍	5回以内	オオタバコガ、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類には1000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。 花華やか 顆粒水溶剤と合わせ5回以内。
生育期 発病初期	オンシツコナジラミ 若齢幼虫	カルホス乳剤(劇)	1B	散布	1,000倍	4回以内	カルホス微粒剤Fを使用した後は使用不可。
生育期 発病初期	コナジラミ類	ベストガード水溶剤	4A	散布	1,000倍	4回以内	アブラムシ類にも適用あり。
生育期 発病初期	ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	15	散布	2,000倍	2回以内	高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
		コテツフロアブル(劇)	13	散布	2,000倍	2回以内	ハダニ類、ミカンキイロアザミウマにも適用あり。ハダニ類では、卵・幼虫・成虫時に効果がある。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
生育期 発病初期	オオタバコガ	アクセルフロアブル	22B	散布	1,000倍	6回以内	
		プレオフロアブル	UN	散布	1,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
		フェニックス顆粒水和剤	28	散布	2,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
		ディアナSC	5	散布	2,500倍	2回以内	コナジラミ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類にも適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
生育期		カネマイトフロアブル	20B	散布	1,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
生育期 発病初期	ハダニ類	バロックフロアブル	10B	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		ダニサラバフロアブル	25A	散布	1,000倍	2回以内	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		アグリメック(劇)	6	散布	500倍	5回以内	アザミウマ類にも適用あり。
		エコピタ液剤	—	散布	100倍	—	気門封鎖剤 うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。
生育期		サンクリスタル乳剤	—	散布	600倍	—	気門封鎖剤 うどんこ病にも適用あり。 展着剤不要。

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード 3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。但し、気門封鎖剤(エコピタ液剤、サンクリスタル乳剤)は除きます。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。)

◇ウイルス・ウィロイド性病害：繁殖用の球根、球芽は健全株から採取する。発病株は早期に抜き取り、適切に処分する。

発病株に触れた手(ハサミ)で健全株に触れない。ハサミの消毒は家庭用塩素系漂白剤等の次亜塩素酸ナトリウム液でこまめに行う。

◇発生予防に基づく防除 ほ場内の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類は黄色に誘引される。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

露地ダリア病害虫防除暦

JA山形おきたまダリア振興部会

使用時期	適用病害虫	農薬名	ローテーション回数	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植時	カブラヤガ	カルホス微粒剤F(劇)		1B	作業処理 土壌混和	6kg/10a	1回	
6月上旬	バッタ類・アオムシ	スミチオン乳剤		1B	散布	1,000倍	6回以内	アザミウマ類にも適用あり。
6月下旬	うどんこ病 アブラムシ類	サンヨール	1	M1	散布	500倍	8回以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、ハダニ類にも適用あり。
7月上旬	アブラムシ類・アオムシ	オルトラン水和剤		1B	散布	1,000倍	5回以内	発生初期に使用。アザミウマ類、ヨトウムシ類にも適用あり。
7月中旬	ヨトウムシ類・ミカンキロアザミウマ・ハダニ類	コテツフロアブル(劇)	1	13	散布	2,000倍	2回以内	発生初期 ハダニ類では、卵・幼虫・成虫時に効果がある。高温時の散布で花が焼ける被害が発生する恐れがあるので注意する。
7月下旬	ハダニ類	アグリメック(劇)		6	散布	500倍	5回以内	発生初期に使用。アザミウマ類にも適用あり。
8月1週	オオタバコガ	フェニックス顆粒水和剤	1	28	散布	2,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
8月2週	アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤(劇)		4A	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
8月3週	オオタバコガ・アザミウマ類	ディアナSC	1	5	散布	2,500倍	2回以内	発生初期 コナジラミ類、ハモグリバエ類にも適用あり。高温時の散布で花が焼ける被害が発生する恐れがあるので注意する。
8月4週	うどんこ病・アザミウマ類	ポリオキシシAL水溶剤		19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病初期(発生初期) 灰色かび病、黒斑病、ハダニ類にも適用あり。
9月1週	オオタバコガ	プレオフロアブル	1	UN	散布	1,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
9月2週	オオタバコガ	フェニックス顆粒水和剤	2	28	散布	2,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
9月3週	オオタバコガ・アザミウマ類	ディアナSC	2	5	散布	2,500倍	2回以内	発生初期 コナジラミ類、ハモグリバエ類にも適用あり。高温時の散布で花が焼ける被害が発生する恐れがあるので注意する。
9月4週	オオタバコガ	プレオフロアブル	2	UN	散布	1,000倍	4回以内	発生初期 ハスモンヨトウにも適用あり。
10月上旬	ヨトウムシ類・ミカンキロアザミウマ・ハダニ類	コテツフロアブル(劇)	2	13	散布	2,000倍	2回以内	発生初期 ハダニ類では、卵・幼虫・成虫時に効果がある。高温時の散布で花が焼ける被害が発生する恐れがあるので注意する。
10月中旬	うどんこ病・ハダニ類 アブラムシ類・アザミウマ類	花華やか 顆粒水溶剤		6、3 4A	散布	500倍	5回以内	予防剤 発生初期 高温時は薬害の恐れあり。 DMI剤は耐性リスクがあるため、総使用回数は2回以内とする。
10月下旬	うどんこ病 アブラムシ類	サンヨール	2	M1	散布	500倍	8回以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、ハダニ類にも適用あり。


※病害虫の発生がみられた場合は、前ページのダリア病害虫防除基準を参考に、追加で防除を実施しましょう。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード`3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード`3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。但し、気門封鎖剤(エコピタ液剤、サンクリスタル乳剤)は除きます。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

ダリアの葉・茎・花を食害する虫

(平成23、24年度置賜総合支庁産地研究室研究成績書より)



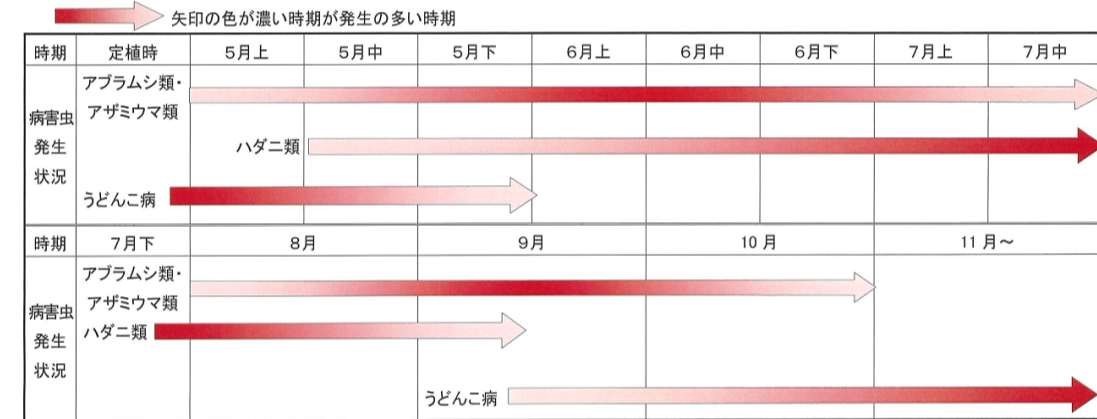
【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

ハウスダリア病害虫防除暦

JA山形おきたまダリア振興部会

使用時期	適用病害虫	農薬名	ローテーション回数	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植時	カブラヤガ	カルホス微粒剤F(劇)		1B	作業処理 土壌混和	6kg/10a	1回	
5月上旬	うどんこ病	カリグリーン		NC	散布	800倍	—	予防剤 発病初期
5月中旬	うどんこ病	ポリオキシンAL水溶剤	1	19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病、発生初期 灰色かび病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
5月下旬	うどんこ病 アブラムシ類	サンヨール	1	M1	散布	500倍	8回以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、ハダニ類にも適用あり。
6月上旬	アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤(劇)		4A	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
6月中旬	ヨトウムシ類・ ハモグリバエ類	アフーム乳剤		6	散布	1,000倍	5回以内	発生初期 オオタバコガにも適用あり。アザミウマ類には2,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
6月下旬	うどんこ病・ ハダニ類	サンクリスタル乳剤	1	-	散布	600倍	—	農着剤不要。
7月上旬	アザミウマ類	アグリメック(劇)		6	散布	500倍	5回以内	発生初期に使用。ハダニ類にも適用あり。
7月中旬	ヨトウムシ類・ ハダニ類	コテツフロアブル(劇)		13	散布	2,000倍	2回以内	発生初期 ミカンキイロアザミウマにも適用あり。ハダニ類では、卵・幼虫・成虫時に効果がある。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
7月下旬	ハダニ類	パロックフロアブル		10B	散布	2,000倍	1回	発生初期 卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
8月上旬	ハダニ類	サンクリスタル乳剤	2	-	散布	600倍	—	うどんこ病にも適用あり。 農着剤不要。
8月下旬	ハダニ類	ダニサラバフロアブル		25A	散布	1,000倍	2回以内	発生初期 卵・幼虫・成虫に効果がある。
9月上旬	うどんこ病・ アザミウマ類	ポリオキシンAL水溶剤	2	19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病、発生初期 灰色かび病、黒斑病、ハダニ類にも適用あり。
9月中旬	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤		9B	散布	4,000倍	4回以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
9月下旬	うどんこ病・ ハダニ類	サンクリスタル乳剤	3	-	散布	600倍	—	農着剤不要。
10月上旬	コナジラミ類	ベストガード水溶剤		4A	散布	1,000倍	4回以内	発生初期 アブラムシ類にも適用あり。
10月下旬	うどんこ病 アブラムシ類	サンヨール	2	M1	散布	500倍	8回以内	予防剤 発生初期 灰色かび病、ハダニ類にも適用あり。
11月上旬	うどんこ病	パンチョTF顆粒水和剤		U6、3	散布	2,000倍	2回以内	

ハウスダリアの病害虫発生予想



※ハウスサイドに寒冷沙を設置した場合の防除暦

※薬剤を初めて使用する場合は必ず試し散布をして下さい。また、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード 3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。但し、気門封鎖剤(エコピタ液剤、サンクリスタル乳剤)は除きます。

※高温時の散布で薬害が発生する恐れがありますので、早朝等の涼しい時間帯に防除を実施して下さい。

※使用時期はあくまで目安であり、発生状況を確認しながら防除を実施して下さい。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

啓翁桜病虫害防除暦

JA山形おきたま枝物振興部会

使用時期	適用病虫害	農薬名	回数	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
病枝切除後	てんぐ巣病	トップジンMペースト		1	塗布	原液	5回以内	病枝切除後に使用。トップジンM水和剤は同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
発芽前	カイガラムシ類	スプレーオイル		UNM, NC	散布	50倍	—	
生育期	カイガラムシ類	マツグリーン液剤2	1	4A	散布	250倍	5回以内	発生初期。ケムシ類にも適用あり。アブラムシ類(500倍)にも適用あり。
	カイガラムシ類幼虫	アプロードフロアブル	1	16	散布	1,000倍	6回以内	発生初期。カイガラムシ類の発生が見られる園で積雪等により発芽前の防除ができなかった場合には、融雪後から開花期までに散布する。
展葉始期～ 展葉期	幼果菌核病	トップジンM水和剤		1	散布	1,000倍	5回以内	発病初期。うどんこ病、炭疽病、ごま色斑点病、輪紋葉枯病、斑点症にも適用あり。トップジンMペーストは同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
		サンリット水和剤		3	散布	2,000倍	3回以内	予防・治療剤
5月中旬	コスカシバ	スカシバコンL		—	枝にまきつけ設置する	40～100本/10a	—	成虫発生初期～終期に使用。8g/100本製剤
5月下旬	カイガラムシ類	マツグリーン液剤2	2	4A	散布	250倍	5回以内	発生初期。ケムシ類にも適用あり。アブラムシ類(500倍)にも適用あり。
	カイガラムシ類幼虫	カルホス乳剤(劇)	1	1B	散布	1,000倍	6回以内	発生初期。カイガラムシ類の発生がみられる園地で、歩行性幼虫の発生が確認されたら防除を実施する。
6月中旬	カイガラムシ類	アプロードフロアブル	2	16	散布	1,000倍	6回以内	発生初期。ケムシ類にも適用あり。アブラムシ類(500倍)にも適用あり。
	カイガラムシ類幼虫	マツグリーン液剤2	3	4A	散布	250倍	5回以内	発生初期。ケムシ類にも適用あり。アブラムシ類(500倍)にも適用あり。
6月下旬～ 7月上旬	ケムシ類	フェニックスフロアブル	1	28	散布	4,000倍	2回以内	発生初期
	ケムシ類 シャクトリムシ類	アクセルフロアブル		22B	散布	1,000倍	6回以内	発生初期
7月中旬	ケムシ類	トレボン乳剤		3A	散布	4,000倍	6回以内	幼虫発生期。合成ピレスロイド剤であるので抵抗性害虫出現防止のため連用は避け、同一ほ場における総使用回数は2回以内とする。オビカレハには2,000倍で適用あり。
	カイガラムシ類	マツグリーン液剤2	4	4A	散布	250倍	5回以内	発生初期。ケムシ類にも適用あり。アブラムシ類(500倍)にも適用あり。
8月中旬	カイガラムシ類	カルホス乳剤(劇)	3	1B	散布	1,000倍	6回以内	発生初期。カイガラムシ類の発生がみられる園地で、歩行性幼虫の発生が確認されたら防除を実施する。
	カイガラムシ類幼虫	アプロードフロアブル	4	16	散布	1,000倍	6回以内	発生初期。5月下旬、6月中旬、7月中旬、9月下旬～10月上旬の防除と合わせて総使用回数6回以内とする。
9月上旬	ケムシ類	フェニックスフロアブル	2	28	散布	4,000倍	2回以内	発生初期
9月下旬～ 10月上旬	カイガラムシ類 (カツラマルカイガラムシ 第2世代)	カルホス乳剤(劇)	5	1B				発生初期。5月下旬、6月中旬、7月中旬、8月中旬の防除と合わせて総使用回数6回以内とする。

植物成長調整剤

使用時期	使用目的	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
休眠期 (促成開始前)	休眠打破による 発芽促進	CX-10	—	切り枝全面 散布又は 切り枝浸漬	20倍	1回	温湯処理と併用する場合は、低温遭遇時間により20～50倍希釈で効果が期待できる。使用後最低24時間は飲酒を控える。
休眠期	休眠打破による 生育促進	ジベレリン	—		25～50ppm	1回	温湯処理と併用する場合は、低温遭遇時間により25～50ppmで効果が期待できる。

除草剤

使用時期	適用雑草名	農薬名	RACコード	使用方法	液量/希釈水量 (10a当たり)	使用回数	注意事項
雑草生育期	一年生雑草	ラウンドアップマックスロード	9	雑草茎葉 散布	200～500mℓ /50～100ℓ	4回以内	作物に飛散しないように注意する。 ザクサ液剤とバスタ液剤は合わせて3回以内
		バスタ液剤	10		300～500mℓ /100～150ℓ	3回以内	
		ザクサ液剤	10		300～500mℓ /100～150ℓ		

※薬剤を対象病虫害ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード 3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※低温遭遇時間(8℃以下)800時間以下の場合、温湯処理と植物成長調整剤を併用した休眠打破処理を行います(目安時間)。

◇耕種的・物理的防除:幼果菌核病: 園地の圃場環境改善のため、消雪後全面耕うんし、被害葉、被害果をすき込むとともに地表面の乾燥を図る。

発病の多い枝は、切り取り適正に処分する。除草を徹底する等、過湿とならないよう園地を管理する。

コスカシバ: コスカシバの食入した所にはヤニ(虫糞)が出ているので見つけしだい捕殺する。

◇発生予測に基づく防除: 粘着テープを樹の枝に巻きつけたトラップでカイガラムシ類幼虫の発生を把握し、低密度時の早期防除に努める。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

トルコぎきょう病害虫防除基準

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
植付前	株腐病 根腐病 青枯病 立枯病	ガスタード微粒剤(劇)	8F	土壌混和	30kg/10a	1回	有効なガスが抜けないようにビニール被覆または鎮圧後散水する。特に地温が25℃以上の時には必ず被覆する。その他の注意事項が多いため商品のラベルを要確認。
育苗中 発生初期	クロバネキノコバエ類	トリガード液剤	17	土壌灌注	1,000倍	1回	土壌灌注はジョウロ等を使って2L/m ² に散布することである。
定植時 発生初期	アブラムシ類 アザミウマ類	オルトラン粒剤	1B	株元散布	6kg/10a	5回以内	ヨトウムシ類にも適用あり。オルトラン水和剤と併せて5回以内とする。
生育期 発病初期	灰色かび病	アフェットフロアブル	7	散布	2,000倍	3回以内	予防剤 浸透性殺菌剤、耐性菌出現防止のため使用回数は2回まで。
		フルピカフロアブル	9	散布	2,000倍	5回以内	予防剤 高温時に薬害の恐れがあるので注意する。
		ゲッター水和剤	1、10	散布	1,000倍	5回以内	予防・治療剤 同成分を含むトップジンM水和剤と併せて5回以内とする。連用により耐性菌が懸念されるので注意する。
		ポリオキシシンAL水溶剤	19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 うどんこ病、黒斑病、斑点病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
発病前 発生初期	斑点病	ダコニール1000	M5	散布	1,000倍	6回以内	うどんこ病にも適用あり
生育期 発病初期		パレード20フロアブル	7	散布	2,000倍	3回以内	うどんこ病にも4,000倍で適用あり
生育期 発生初期	ミカンキイロアザミウマ	モスピランジェット(劇)	4A	くん煙	50g/400m²	5回以内	アブラムシ類にも適用あり。モスピラン顆粒水溶剤と合わせて5回以内(400m ² =床面積200m ² ×高さ2m)
		アクタラ顆粒水溶剤	4A	散布	1,000倍	6回以内	コナジラミ類、ハモグリバエ類にも2,000倍で適用あり
生育期 発生初期	アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤(劇)	4A	散布	2,000倍	5回以内	アブラムシ類にも適用あり。モスピランジェットと合わせて5回以内
		ディアナSC	5	散布	2,500倍	2回以内	高温時に薬害の恐れあり。オオタバコガ、ハモグリバエ類にも適用あり。
	ヒラズハナアサミウマ	アディオンフロアブル	3A	散布	1,500倍	6回以内	合成ピレスロイド剤(RACコード 3A)であるので抵抗性害虫出現防止のため連用は避け、同一ほ場における総使用回数は2回以内とする。
生育期 発生初期	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	9B	散布	4,000倍	4回以内	IBR剤新しいタイプの殺虫剤。コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
生育期 発生初期	ハスモンヨトウ	マッチ乳剤	15	散布	2,000倍	5回以内	
生育期 発生初期	ヨトウムシ類	コテツフロアブル(劇)	13	散布	2,000倍	2回以内	ミカンキイロアザミウマ、ハダニ類にも適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
生育期 発生初期	オオタバコガ	プレオフロアブル	UN	散布	1,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
		フェニックス顆粒水和剤	28	散布	2,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
生育期 発生初期	ハモグリバエ類	アフーム乳剤	6	散布	1,000倍	5回以内	オオタバコガ、ヨトウムシ類にも適用あり。アザミウマ類に2,000倍で適用あり。
生育期 発生初期	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	21A	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
生育期		カネマイトフロアブル	20B	散布	1,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
生育期 発生初期		バロックフロアブル	10B	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。ただし、散布された成虫が生む卵には孵化抑制効果がある。
		ダニサラバフロアブル	25A	散布	1,000倍	2回以内	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		エコピタ液剤	—	散布	100倍	—	気門封鎖剤 コナジラミ類、うどんこ病、アブラムシ類にも適用あり。

植物成長調整剤

使用目的	使用時期	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	散布液量
生育促進	生育期間中に ロゼット化した時	ジベレリン	—	茎葉散布	50~100ppm	1回	30~40ℓ/10a

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード 3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。但し、気門封鎖剤(エコピタ液剤乳剤)は除きます。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。7月中旬の防除は必ず行って下さい。)

◇耕種的・物理的防除: 灰色かび病: は、多湿条件下で発生しやすいため、密植・茎葉の過繁茂は避ける。施設栽培においては、過湿にならないよう換気を行う。

シロイチモジヨトウ・ハスモンヨトウ: ハウスの開口部に5mm目以下の防虫ネットを張る。

◇発生予察に基づく防除: ほ場内の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類は黄色に誘引される。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

ヒマワリ病害虫防除基準

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
生育期 発病前～ 発病初期	べと病 茎腐病 黒斑病 立枯病 苗立枯病	オーソサイド水和剤80	M4	散布	600倍	8回以内	予防剤
生育期	斑点病	ゲッター水和剤	10、1	散布	1,000倍	5回以内	灰色かび病にも適用あり。※トップジンM水和剤は同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
生育期	菌核病	トップジンM水和剤	1	散布	1,500倍	5回以内	ゲッター水和剤は同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
発病初期 発生初期	うどんこ病	ポリオキシAL水溶剤	19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 灰色かび病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
生育期 発病初期	灰色かび病	フルピカフロアブル	9	散布	2,000倍	5回以内	予防剤
生育期 発生初期	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	9B	散布	4,000倍	4回以内	コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
		スタークル顆粒水溶剤	4A	散布	2,000倍	5回以内	コナジラミ類にも適用あり。ハモグリバエ類には1000倍(灌注1ℓ/m ²)で適用あり。
		オルトラン水和剤	1B	散布	1,000倍	5回以内	アザミウマ類、ヨトウムシ類、アオムシ、タバコガにも適用あり。
		ロディー乳剤(劇)	3A	散布	1,000倍	6回以内	ハダニ類にも適用あり。合成ピレスロイド剤(RACコード 3A)は抵抗性害虫出現防止のため連用は避け総使用回数は2回以内とする。
		アドマイヤーフロアブル(劇)	4A	散布	2,000倍	5回以内	アドマイヤー1粒剤と合わせて5回以内。
		アドマイヤー1粒剤	4A	株元散布	2g/株	5回以内	アドマイヤーフロアブルと合わせて5回以内。但し、6kg/10aまで。
生育期 発生初期	アザミウマ類	アフーム乳剤	6	散布	2,000倍	5回以内	オオタバコガ、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類には1,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
生育期 発生初期	ミカンキイロアザミウマ	アクタラ顆粒水溶剤	4A	散布	1,000倍	6回以内	ハモグリバエ類にも2,000倍で適用あり。
生育期 発生初期	オンシツコナジラミ 若齢幼虫	カルホス乳剤(劇)	1B	散布	1,000倍	4回以内	
生育期 発生初期	コナジラミ類	チェス顆粒水和剤	9B	散布	5,000倍	4回以内	アブラムシ類にも適用あり。
		ベストガード水溶剤	4A	散布	1,000倍	4回以内	アブラムシ類にも適用あり。
生育期 発生初期	ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	15	散布	2,000倍	2回以内	高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
		コテツフロアブル(劇)	13	散布	2,000倍	2回以内	ミカンキイロアザミウマ、ハダニ類にも適用あり。高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
生育期 発生初期	オオタバコガ	アクセルフロアブル	22B	散布	1,000倍	6回以内	
		フェニックス顆粒水和剤	28	散布	2,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
生育期 発生初期	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	21A	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		バロックフロアブル	10B	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。
		ダニサラバフロアブル	25A	散布	1,000倍	2回以内	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		エコピタ液剤	—	散布	100倍	—	気門封鎖剤 うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。

ハウスの開口部に1mm目以下の防虫ネットまたは寒冷紗を張る。

※ 薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード 3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。但し、気門封鎖剤(エコピタ液剤)は除きます。

※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※ 殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。7月中旬の防除は必ず行って下さい。)

◇ 耕種的・物理的防除 立枯病: 高温・多湿は発生を助長するので、施設で換気をはかり、加湿にならないようにする。排水を良くする。

チョウ目害虫・アブラムシ類・コナジラミ類・アザミウマ類: 施設栽培では、ハウスの開口部に1mm目以下の白の防虫ネットまたは寒冷紗を張る。

◇ 発生予察に基づく防除 ほ場内の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。※アブラムシ類、コナジラミ類は黄色に誘引される。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

デルフィニウム病害虫防除基準

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植前	立枯病 白絹病	ガスタード微粒剤(劇)	8F	土壌混和	30kg/10a	1回	有効なガスが抜けないようにビニール被覆または鎮圧後散水する。特に地温が25℃以上の時には必ず被覆する。その他の注意事項が多いため商品のラベルを確認する。
	立枯病	リゾレックス粉剤	14	土壌混和	50kg/10a	1回	リゾレックス粉剤、リゾレックス水和剤は同一成分を含み、総使用回数は5回以内とする。
生育期	立枯病	リゾレックス水和剤	14	土壌灌注 3ℓ/㎡	500倍	5回以内	リゾレックス水和剤は株腐病、茎腐病、白絹病(株元灌注)にも適用あり。
生育期	白絹病	モンカットフロアブル40	7	株元散布	1,000倍	3回以内	
生育期 発病初期	うどんこ病	アンビルフロアブル	3	散布	1,000倍	7回以内	DMI剤(RACコード 3)は耐性リスクが高いため、総使用回数は2回以内とする。
		サンヨール	M1	散布	500倍	8回以内	予防剤 灰色かび病、アブラムシ類、ハダニ類の発生初期にも適用あり。
		ポリオキシシンAL水溶剤	19	散布	2,500倍	8回以内	予防・治療剤 灰色かび病、黒斑病にも適用あり。アザミウマ類、ハダニ類の発生初期にも適用あり。
生育期 発病初期	灰色かび病	フルピカフロアブル	9	散布	2,000倍	5回以内	予防剤
生育期		ゲッター水和剤	10、1	散布	1,000倍	5回以内	予防・治療剤
発病前～ 発病初期		ボトキラー水和剤	BM2	ダクト内 投入	15g/10a (1日あたり)	—	予防剤 微生物殺菌剤
生育期 発生初期	コナジラミ類	ベストガード水溶剤	4A	散布	1,000倍	4回以内	アブラムシ類にも適用あり。
生育期 発生初期	コナジラミ類 アブラムシ類	チェス顆粒水和剤	9B	散布	5,000倍	4回以内	
生育期 発生初期	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	9B	散布	4,000倍	4回以内	コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
生育期		ロディー乳剤(劇)	3A	散布	1,000倍	6回以内	合成ピレスロイド剤(RACコード 3A)なので、抵抗性を考慮し連用を避けると共に、同一ほ場における総使用回数は2回以内とする。ハダニ類にも適用あり。
生育期 発生初期	ヨトウムシ類	オルトラン水和剤	1B	散布	1,000倍	5回以内	アザミウマ類、アブラムシ類にも適用あり。
		アフーム乳剤	6	散布	1,000倍	5回以内	オオタバコガ、ハモグリバエ類は1,000倍、アザミウマ類には2,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
生育期 発生初期	オオタバコガ ハスモンヨトウ	フェニックス顆粒水和剤	28	散布	2,000倍	4回以内	
生育期 発生初期	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	21A	散布	2,000倍	1回	幼虫・成虫に効果がある。
生育期		カネマイトフロアブル	20B	散布	1,000倍	1回	シクラメンホコリダニにも適用あり。卵・幼虫・成虫に効果がある。
生育期 発生初期		バロックフロアブル	10B	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。ただし、散布された成虫が生む卵には孵化抑制効果がある。
		ダニサラバフロアブル	25A	散布	1,000倍	2回以内	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		エコピタ液剤	—	散布	100倍	—	気門封鎖剤、うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。
発生時	カタツムリ類 ナメクジ類	スラゴ	—	株元配置	1～5g/㎡	—	ナメクジ類及びカタツムリ類の発生あるいは被害の受けた場所、又は株元に配置する。

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード 3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。但し、気門封鎖剤(エコピタ液剤乳剤)は除きます。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。)

◇耕種的・物理的防除 :立枯病: 発病株は早期に抜き取り、適切に処分する。

:灰色かび病: 多湿条件下で発生しやすいため、密植・茎葉の過繁茂は避ける。施設栽培においては、過湿にならないよう換気を行う。

◇発生予察に基づく防除 :ほ場内の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。※アブラムシ類、コナジラミ類は黄色に誘引される。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

ストック病害虫防除基準

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
は種又は植付前	立枯病 萎凋病(フザリウム菌) 苗腐病	ガスタード微粒剤(劇)	8F	土壌混和	30kg/10a	1回	有効なガスが抜けないようにビニール被覆または鎮圧後散水する。特に地温が25℃以上の時には必ず被覆する。その他の注意事項が多いため、商品のラベルを要確認。
定植時	コナガ	オンコル粒剤5	1A	株元散布	0.5g/株	1回	9kg/10a全面土壌混和でも適用あり。
生育期	菌核病	トップジンM水和剤	1	散布	1,500倍	5回以内	予防・治療剤
生育期 発病初期	灰色かび病	アフェットフロアブル	7	散布	2,000倍	3回以内	予防剤(浸透性殺菌剤) 耐性菌出現防止のため使用回数は2回まで。
		フルピカフロアブル	9	散布	2,000倍	5回以内	予防剤
		ポリオキシシンAL水溶剤	19	散布	2,500倍	8回以内	予防・治療剤 うどんこ病、黒斑病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
発病前～ 発病初期		ボトキラー水和剤	BM2	ダクト内投入	15g/10a (1日あたり)	—	予防剤 微生物殺菌剤
生育期 発生初期	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	9B	散布	4,000倍	4回以内	コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
		スタークル顆粒水溶剤	4A	散布	2,000倍	5回以内	コナジラミ類にも適用あり。ハモグリバエ類には1,000倍(灌注1ℓ/m ²)で適用あり。
発生初期	コナガ	マブリック水和剤20(劇)	3A	散布	2,000倍	2回以内	合成ピレスロイド剤(RACコード 3A)は抵抗性害虫出現防止のため連用は避け総使用回数は2回以内とする。
生育期 発生初期		トアロー水和剤CT	11A	散布	1,000倍	—	
生育期 発生初期	コナガ ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	15	散布	2,000倍	2回以内	アオムシにも適用あり。
		オルトラン水和剤	1B	散布	1,000倍	5回以内	アブラムシ類、アザミウマ類、アオムシ、ハイマダラノメイガにも適用あり。
		コテツフロアブル(劇)	13	散布	2,000倍	2回以内	アオムシ、ミカンキイロアザミウマ、ハダニ類に適用あり。
		アフーム乳剤	6	散布	1,000倍	5回以内	オオタバコガ、ハモグリバエ類にも適用あり。アザミウマ類には2,000倍で適用あり。施設栽培のみ使用可能。
生育期 発生初期	ハスモンヨトウ	フェニックス顆粒水和剤	28	散布	2,000倍	4回以内	オオタバコガにも適用あり。

植物成長調整剤

使用目的	使用時期	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
開花 促進	葉数10～14枚時と その7～10日後	ビビフルフロアブル	—	茎葉散布	1,000倍 100ℓ/10a	2回	花芽分化した株には使用しない。

※薬剤を対象病害虫ごとに価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、については、登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。

※散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

◇耕種的・物理的防除: 灰色かび病は、多湿条件下で発生しやすいため、密植・茎葉の過繁茂は避ける。施設栽培においては、過湿にならないよう換気を行う。
コナガ・ヨトウムシ類・アオムシ: ハウスの開口部に5mm目以下の防虫ネットを張る。

◇発生予察に基づく防除: ほ場内の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類は黄色に誘引される。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

キク病害虫防除基準①

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
挿し芽時 発病初期	白さび病	バシタック水和剤75	7	散布	500倍	5回 以内	挿し穂に散布し、直ちに挿し芽を行う。アフェットフロアブル、カナメフロアブルと同一成分と見なし、同一圃場における総使用回数は2回以内とする。
植付前	センチュウ類 (ハガレセンチュウを除く)	ガスタード微粒剤(劇)	8F	土壌混和	30kg/10a	1回	有効なガスが抜けないようにビニール被覆または鎮圧後散水する。特に地温が25℃以上の時には必ず被覆する。その他の注意事項が多いため商品のラベルを確認する。
定植時 発生初期	アザミウマ類 マメハモグリバエ	ダントツ粒剤	4A	生育期 株元散布	2g/株	4回 以内	アブラムシ類にも適用あり。
生育期	白さび病 ※6月上中旬に 防除を徹底する	コロナフロアブル	UN、M2	散布	800倍	-	石灰硫黄合剤、ボルドー液等アルカリ性薬剤との混用はさける。28℃以上の気温では使用しない。
生育期 発病初期		アンビルフロアブル	3	散布	1,000倍	7回 以内	予防・治療剤 うどんこ病にも適用あり。DMI剤(RACコード3)は耐性菌出現防止のため、同系統のトリフミン乳剤、トリフミンジェットは連用しない。また、併せて2回以内とする。
生育期		カナメフロアブル(劇)	7	散布	8,000倍	3回 以内	バシタック水和剤75、アフェットフロアブルと同一成分と見なし、同一圃場における総使用回数は2回以内とする。
生育期		ジマンダイセンフロアブル	UN、M3	散布	500倍	8回 以内	予防剤 石灰硫黄合剤、ボルドー液等アルカリ性薬剤及びチオジカルブ剤との混用は避ける。高温時の使用を避ける。
生育期 発病初期		アフェットフロアブル	7	散布	2,000倍	3回 以内	うどんこ病、灰色かび病にも適用あり。バシタック水和剤75、カナメフロアブルと同一成分と見なし、同一圃場における総使用回数は2回以内とする。
生育期		トリフミン乳剤	3	散布	1,000倍	5回 以内	予防剤 DMI剤(RACコード3)は耐性菌出現防止のため、同系統のアンビルフロアブル、トリフミンジェットは連用しない。また、併せて2回以内とする。
生育期 発病初期		ピリカット乳剤	39	散布	1,000倍	6回 以内	予防剤 アブラムシ類にも適用あり。2,000倍でうどんこ病にも適用あり。
生育期 発病初期		ポリオキシシンAL水溶剤	19	散布	2,500倍	8回 以内	予防剤 うどんこ病、黒斑病、灰色かび病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
生育期	斑点細菌病	スターナ水和剤	31	散布	1,000倍	5回 以内	予防剤
生育期	褐斑病	トップジンM水和剤	1	散布	1,500倍	5回 以内	予防剤
発病前 発病初期		ダコニール1000	M5	散布	1,000倍	6回 以内	予防剤 うどんこ病、白さび病、斑点病、黒斑病にも適用あり。
生育期 発生初期		サンヨール	M1	散布	500倍	8回 以内	予防剤 うどんこ病、灰色かび病、白さび病、黒斑病、アブラムシ類、ハダニ類にも適用あり。
生育期 発生初期	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	9B	散布	4,000倍	4回 以内	IBR剤新しいタイプの殺虫剤。コナジラミ類にも適用あり。アルカリ性の強い薬剤との混用を避ける。
生育期 発生初期		スタークル顆粒水溶剤	4A	散布	2,000倍	5回 以内	カメムシ類、コナジラミ類に適用あり、ハモグリバエ類に(灌注1ℓ/m ²)で適用あり。
生育期 発生初期		オルトラン水和剤	1B	散布	1,000倍	5回 以内	アザミウマ類、ヨトウムシ類、アオムシ、マメハモグリバエ、オオタバコガにも適用あり。
生育期 発生初期		ウララ50DF	29	散布	5,000倍	6回 以内	
生育期 発生初期		ハチハチ乳剤(劇)	39、21A	散布	1,000倍	4回 以内	アザミウマ類、ハモグリバエ類、白さび病にも適用あり。
生育期 発生初期	アザミウマ類	カウンター乳剤	15	散布	2,000倍	5回 以内	オオタバコガにも適用あり。
生育期 発生初期		ファインセーブフロアブル(劇)	34	散布	2,000倍	2回 以内	
生育期 発生初期	ミカンキイロアザミウマ	アーデント水和剤	3A	散布	1,000倍	5回 以内	合成ピレスロイド剤(RACコード3A)であるので抵抗性害虫出現防止のため連用は避け、同一ほ場における総使用回数は2回以内とする。アブラムシ類、ハダニ類にも適用あり。
生育期 発生初期		ベストガード水溶剤	4A	散布	1,000倍	4回 以内	コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。
発生初期	アザミウマ類	アベンジャーフロアブル(劇)	34	散布	2,000倍	2回 以内	
生育期 発生初期	オンシツコナジラミ若齢幼虫	カルホス乳剤(劇)	1B	散布	1,000倍	4回 以内	マメハモグリバエにも適用あり。
生育期 発生初期	マメハモグリバエ	トリガード液剤	17	散布	1,000倍	4回 以内	
生育期 発生初期	ハモグリバエ類	アクタラ顆粒水溶剤	4A	散布	2,000倍	6回 以内	ミカンキイロアザミウマに1,000倍で適用有り。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

キク病害虫防除基準②

JA山形おきたま花卉振興会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
生育期 発生初期	ヨトウムシ類	ノーモルト乳剤	15	散布	2,000倍	2回以内	高温時の散布で花が焼ける薬害が発生する恐れがあるので注意する。
		コテツフロアブル(劇)	13	散布	2,000倍	2回以内	オオタバコガ、ハダニ類、アワダチソウゲンバイ、ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマにも適用あり。
生育期 発生初期	オオタバコガ	グレーシア乳剤	30	散布	2,000倍	2回以内	アザミウマ類、ハダニ類、ハスモンヨトウにも適用あり。
		ブロフレアSC	30	散布	2,000倍	3回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
		アクセルフロアブル	22B	散布	1,000倍	6回以内	シロイチモジヨトウにも適用あり。
		プレオフロアブル	UN	散布	1,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
		フェニックス顆粒水和剤	28	散布	2,000倍	4回以内	ハスモンヨトウにも適用あり。
		ディアナSC	5	散布	2,500倍	2回以内	アザミウマ類、ハモグリバエ類にも適用あり。
		アニキ乳剤	6	散布	1,000倍	6回以内	ハスモンヨトウ、マメハモグリバエにも適用あり。アグリメックと同系統のため連用を避ける。
生育期 発生初期	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	21A	散布	1,000倍	1回	アブラムシ類にも適用あり。卵・幼虫・成虫に効果がある。
生育期		カネマイトフロアブル	20B	散布	1,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
生育期 発生初期		バロックフロアブル	10B	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫には効果があるが成虫には効果なし。ただし、散布された成虫が生む卵には孵化抑制効果がある。
		スターマイトフロアブル	25A	散布	2,000倍	1回	卵・幼虫・成虫に効果がある。
		アグリメック(劇)	6	散布	500倍	5回以内	アニキ乳剤と同系統のため連用を避ける。アザミウマ類にも適用有り。
		エコピタ液剤	—	散布	100倍	—	気門封鎖剤。うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類にも適用あり。

植物成長調整剤

使用目的	使用時期	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
さし木の 発根促進及び 発生根数の増加	挿し芽時	オキシベロン液剤	—	10秒挿し穂 基部浸漬	2倍	1回	
開花抑制	摘芯時または定植後1週間 以内及びその後10~14日毎	エスレル10	—	全面散布	500倍 ~1,000倍	3回以内	株全体がぬれる程度散布する。
開花促進、 草丈伸長促進	生育期	ジベレリン	—	茎葉散布	25ppm ~100ppm	2回以内	
節間の 伸長抑制	生育期	ビーナイン顆粒水溶剤	—	茎葉散布	500倍 ~5,000倍	4回以内	施設栽培に限る。
親株栽培時 の側枝への 腋芽の着生 促進	摘芯時	ビーエー液剤	—	茎葉散布	2,000倍 ~4,000倍	6回以内	親株栽培 無側枝性が強く発現する品種及び高温期の栽培では効果 が劣る場合がある。

※ 薬剤を対象病害虫ごとに剤型、価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)については、
登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。但し、気門封鎖剤(エコピタ液剤乳剤)は除きます。

※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

※ 殺ダニ剤は単剤で散布して下さい。(ハダニ類は、初期防除が肝心です。7月中旬の防除は必ず行って下さい。)

◇ 耕種的・物理的防除 ; 白さび病、黒さび病: 無病の冬至芽を植え付ける。罹病葉は早期に摘み取り適切に処分する。

えそ病: 発病株からさし穂を取らない。

黒斑病・褐斑病: 密植を避ける。窒素質肥料の過剰な施用を避ける。

◇ 発生予察に基づく防除 ; ほ場内の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に
防除を徹底する。※アブラムシ類、コナジラミ類は黄色に誘引される。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

りんどう病害虫防除基準

JA山形おきたまりんどう振興部会

使用時期	適用病害虫	農薬名	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植時	カブラヤガ	カルホス微粒剤F(劇)	1B	作条処理 土壌混和	6kg/10a	1回	定植時 本剤を使用した後はカルホス乳剤は使用不可。
生育期 発病初期	葉枯病	Zボルドー	M1	散布	500倍	—	予防剤 発病期以降の使用は避ける。
生育期 発病前～ 発病初期		オーソサイド水和剤80	M4	散布	600倍	8回以内	予防剤 立枯病、苗立枯病、茎腐病にも適用あり。
生育期 発病初期		ピリカット乳剤	39	散布	1,000倍	6回以内	予防剤 アブラムシ類にも適用あり。 うどんこ病には2,000倍で適用あり。
生育期 発病初期	葉枯病 褐斑病	チオノックフロアブル	M3	散布	500倍	6回以内	予防剤 炭疽病、灰色かび病にも適用あり。 トレノックスフロアブルも同成分。
生育期 発病前～ 発病初期		ダコニール1000	M5	散布	1,000倍	6回以内	予防剤
生育期 発病初期	黒斑病 葉枯病 灰色かび病	ポリオキシAL水溶剤	19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 うどんこ病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
生育期 発病初期	褐斑病 黒斑病	ストロビーフロアブル	11	散布	2,000倍	3回以内	予防剤
		アフェットフロアブル	7	散布	2,000倍	3回以内	予防剤 灰色かび病、うどんこ病、花腐菌核病にも適用あり。
		フルピカフロアブル	9	散布	2,000倍	5回以内	予防剤 灰色かび病にも適用あり。
生育期	花腐菌核病	トップジンM水和剤	1	散布	1,500倍	5回以内	予防剤 トップジンMゾルと合わせ5回以内とする。
生育期 発病初期		インダーフロアブル	3	散布	5,000倍	5回以内	予防剤 葉枯病にも適用あり。 DMI剤(RACコード 3)は耐性菌出現防止のため、2回以内とする。
生育期 発病初期		トップジンMゾル	1	散布	1,000倍	5回以内	トップジンM水和剤と合わせ5回以内とする。
生育期 発病初期		パレード20フロアブル	7	散布	2,000倍	3回以内	黒斑病、うどんこ病(4,000倍)、葉枯病(発病前)、褐斑病(発病前)にも適用あり。 耐性菌出現防止のため2回以内とする。
生育期 発生初期	バッタ類 ハマキムシ類	スミチオン乳剤	1B	散布	1,000倍	6回以内	アオムシ・アザミウマ類にも適用あり
生育期 発生初期	リンドウホソハマキ	ノーモルト乳剤	15	散布	1,000倍	2回以内	ヨトウムシ類には2000倍で適用あり。
生育期		アディオフロアブル	3A	散布	1,500倍	6回以内	合成ピレスロイド剤(RACコード 3A)は抵抗性害虫出現防止のため総使用回数は2回以内とする。ヒラズハナアザミウマにも適用あり。
生育期 発生初期	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤	9B	散布	4,000倍	4回以内	コナジラミ類にも適用あり。
生育期 発生初期	アブラムシ類 アザミウマ類	オルトラン水和剤	1B	散布	1,000倍	5回以内	ヨトウムシ類、アオムシにも適用あり。
生育期 発生初期	アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤(劇)	4A	散布	2,000倍	5回以内	アブラムシ類、リンドウホソハマキにも適用あり。
		ハチハチフロアブル(劇)	21A、39	散布	1,000倍	4回以内	
		ディアナSC	5	散布	2,500倍	2回以内	高温時の散布で花が焼ける被害が発生するので注意する。リンドウホソハマキ、ハモグリバエ類、コナジラミ類、オオタバコガ、クロバネキノコバエ類にも適用あり。
生育期 発生初期	ミカンキイロアザミウマ	コテツフロアブル(劇)	13	散布	2,000倍	2回以内	ハダニ類、ヨトウムシ類にも適用あり。
生育期 発生初期	オオタバコガ	アクセルフロアブル	22B	散布	1,000倍	6回以内	
		フェニックス顆粒水和剤	28	散布	2,000倍	4回以内	ハスモンヨトウ、リンドウホソハマキにも適用あり。
生育期 発生初期	ハダニ類	ピラニカEW(劇)	21A	散布	2,000倍	1回	
		スターマイトフロアブル	25A	散布	2,000倍	1回	
		アグリメック(劇)	6	散布	500倍	5回以内	アザミウマ類にも適用あり。

※ 薬剤を対象病害虫ごとに剤型、価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード 3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。

※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

◇ 耕種的・物理的防除 ウイルス病：発病株は早期に抜き取り、適切に処分する。

株の仕立て時や収穫時はハサミを使わず手で折り取る。

◇ 発生予察に基づく防除 ほ場内の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類は黄に誘引される。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

りんどう病害虫防除暦

JA山形おきたまりりんどう振興部会

使用時期	適用病害虫	農薬名	ローテーション回数	RACコード	使用方法	使用量 希釈倍数	使用回数	注意事項
定植時	カブラヤガ	カルホス微粒剤F(劇)		1B	作条処理 土壌混和	6kg/10a	1回	定植時 本剤を使用した後はカルホス乳剤は使用不可。
4月中旬	葉枯病	Zボルドー	1	M1	散布	500倍	—	予防剤 発蕾期以降の使用は避ける。
5月上旬	葉枯病 褐斑病	ダコニール1000	1	M5	散布	1,000倍	6回以内	予防剤 発病前～発病初期
5月中旬	葉枯病	Zボルドー	2	M1	散布	500倍	—	予防剤 発蕾期以降の使用は避ける。
5月下旬	葉枯病 褐斑病	ダコニール1000	2	M5	散布	1,000倍	6回以内	予防剤 発病前～発病初期
	バッタ類 ハマキムシ類	スミチオン乳剤	1	1B	散布	1,000倍	6回以内	アオムシ・アザミウマ類にも適用あり
6月上旬	葉枯病	Zボルドー	3	M1	散布	500倍	—	予防剤 発蕾期以降の使用は避ける。
6月中旬	褐斑病、葉枯病、炭疽病、灰色かび病	チオノックフロアブル	1	M3	散布	500倍	6回以内	予防剤 発病初期 トレノックスフロアブルも同成分。
	リンドウホソハマキ	ノーモルト乳剤		15	散布	1,000倍	2回以内	発生初期に使用。ヨトウムシ類には2000倍で適用あり。
6月下旬	褐斑病 黒斑病	ストロビーフロアブル	1	11	散布	2,000倍	3回以内	予防剤 発病初期
	アザミウマ類	ハチハチフロアブル		21A、39	散布	1,000倍	4回以内	発生初期
7月上旬	黒斑病 葉枯病	ポリオキシシンAL水溶剤	1	19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病発生初期 うどんこ病、灰色かび病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
	アブラムシ類	コルト顆粒水和剤		9B	散布	4,000倍	4回以内	発生初期 コナジラミ類にも適用あり。
7月中旬	褐斑病 黒斑病	アフェットフロアブル	1	7	散布	2,000倍	3回以内	予防剤 発病初期 灰色かび病、うどんこ病、花腐菌核病にも適用あり。
	ミカンキイロアザミウマ	コテツフロアブル(劇)	1	13	散布	2,000倍	2回以内	発生初期に使用。ハダニ類、ヨトウムシ類にも適用あり。
7月下旬	褐斑病 黒斑病	フルピカフロアブル		9	散布	2,000倍	5回以内	予防剤 発病初期 灰色かび病にも適用あり。
	アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤(劇)	1	4A	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 アブラムシ類、リンドウホソハマキにも適用あり。
8月上旬	褐斑病、葉枯病、炭疽病、灰色かび病	チオノックフロアブル	2	M3	散布	500倍	6回以内	予防剤 発病初期
	オオタバコガ	フェニックス顆粒水和剤	1	28	散布	2,000倍	4回以内	発生初期に使用。ハスモンヨトウ、リンドウホソハマキにも適用あり。
8月中旬	黒斑病 葉枯病	ポリオキシシンAL水溶剤	2	19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病発生初期 うどんこ病、灰色かび病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
	オオタバコガ	アクセルフロアブル	1	22B	散布	1,000倍	6回以内	発生初期
8月下旬	花腐菌核病	インダーフロアブル		3	散布	5,000倍	5回以内	予防剤 発病初期 葉枯病にも適用あり。 DMI剤(RACコード 3)は耐性菌出現防止のため、2回以内とする。
	ミカンキイロアザミウマ	コテツフロアブル(劇)	2	13	散布	2,000倍	2回以内	発生初期に使用。ハダニ類、ヨトウムシ類にも適用あり。
9月上旬	褐斑病 黒斑病	ストロビーフロアブル	2	11	散布	2,000倍	3回以内	予防剤 発病初期
	オオタバコガ	フェニックス顆粒水和剤	2	28	散布	2,000倍	4回以内	発生初期に使用。ハスモンヨトウ、リンドウホソハマキにも適用あり。
9月中旬	花腐菌核病 黒斑病	パレード20フロアブル		7	散布	2,000倍	3回以内	発病初期 うどんこ病(4,000倍)、葉枯病(発病前)、褐斑病(発病前)にも適用あり。耐性菌出現防止のため2回以内とする。
	アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤(劇)	2	4A	散布	2,000倍	5回以内	発生初期 アブラムシ類、リンドウホソハマキにも適用あり。
9月下旬	黒斑病 葉枯病	ポリオキシシンAL水溶剤	3	19	散布	2,500倍	8回以内	予防剤 発病発生初期 うどんこ病、灰色かび病、アザミウマ類、ハダニ類にも適用あり。
	オオタバコガ	アクセルフロアブル	2	22B	散布	1,000倍	6回以内	発生初期
10月上旬	褐斑病 黒斑病	アフェットフロアブル	2	7	散布	2,000倍	3回以内	予防剤 発病初期。灰色かび病、うどんこ病、花腐菌核病にも適用あり。
	アザミウマ類	スミチオン乳剤	2	1B	散布	1,000倍	6回以内	アオムシ、バッタ類、ハマキムシ類にも適用あり

※ 薬剤を対象病害虫ごとに剤型、価格順に整理しています。総使用回数は薬剤の1作期における最高散布回数です。

※耐性菌の出現、抵抗性害虫の出現を防止するため、同じRACコードの薬剤の連用は避け、合ピレ剤(RACコード 3A)、DMI剤(EBI剤)(RACコード 3)については登録上の総使用回数にかかわらず、2回以内として下さい。

※ 散布を行う際には、周辺農作物へ飛散しないように十分配慮して下さい。

◇ 耕種的・物理的防除 ウイルス病：発病株は早期に抜き取り、適切に処分する。
株の仕立て時や収穫時はハサミを使わず手で折り取る。

◇ 発生予察に基づく防除 ほ場内の作物体付近に粘着トラップを設置し、対象害虫の発生時期や発生量(飛来・侵入・増殖の状況)を早期に把握し、低密度時に防除を徹底する。 ※アブラムシ類、コナジラミ類は黄に誘引される。

【令和7年12月16日現在の登録内容に基づいて記載しています。】

残留農薬ポジティブリスト制対応 農薬飛散対策チェックシート

記入例

氏 名	コードNO	圃場番号
置賜 華美	12345678	1

【農薬飛散防止対策のために】

チェック項目	チェック	対 策
1 立地条件・散布条件の確認！		
周りは他の作物を栽培している圃場ですか？	V	→作物や収穫日を確認
近くに貯水池や川などの水系はありませんか？	V	→散布方向や風向きに気をつける
風の強さはどうですか？	V	→風が強いときは散布しない
2 近接作物の確認！		
隣接した圃場に収穫間近の他の作物はありませんか？	V	→散布日を変える等調整する
遮へいシート・ネットなどは使っていますか？	V	→きちっと張られているか確認
3 散布器具の確認！		
散布器具のノズルは飛散低減タイプですか？	V	→作物に合わせて選ぶ
散布圧力や風量は調整しましたか？	V	→圧力を上げすぎず、風量は絞る
4 散布方法の確認！		
調整した散布液は適切な量ですか？	V	→必要以上の散布は避ける
作物のない方向に散布はしていませんか？	V	→ノズルの方向に注意する
散布器具は作物に近づけて散布していますか？	V	→できるだけ作物に近づける

【農薬適正使用のために】

チェック項目	チェック	対 策
散布する作物は農薬ラベルの適用作物に入っていますか？	V	適用のない作物には使用しない
農薬の定められた使用方法を守っていますか？	V	使用量・希釈倍数・使用時期・成分ごとの総使用回数は必ず守る
使用する予定の防除機・器具に不具合はありませんか？	V	日ごろの管理を徹底し、使用後は洗浄をする
農薬に触れた手で収穫物を扱っていませんか？	V	農薬を使ったあとは、手を洗う
散布記録を残しましたか？	V	圃場・作物ごとに散布月日・農薬名・散布濃度・散布量を必ず記録する

飛散による事故を防止し、安全・安心な農産物を生産していくために、農薬の使用法を守るとともに、これまで以上に飛散防止対策に努めました。



2026年度 JA山形おきたま花き栽培履歴書【品名:

】 JA山形おきたま花卉振興会

部会名				支店		薬 剤 防 除 記 録												
氏名																		
コードNO		電話		区分	薬 剤 名	対象病害虫	処理量・処理日											
住所							希釈倍数	ℓ・kg	月日	希釈倍数	ℓ・kg	月日	希釈倍数	ℓ・kg	月日	希釈倍数	ℓ・kg	月日
耕 種 概 要						殺菌剤			/			/			/			/
品 種 名	は 種 日							/			/			/			/	
	定 植 日							/			/			/			/	
栽培方法	加温ハウス ・ 無加温ハウス ・ 露地								/			/			/			/
面積	坪 a	収穫開始							/			/			/			/
管 理 作 業							殺虫剤			/			/			/		
内 容	作業日	内 容	作業日						/			/			/			/
	月 日~		月 日~						/			/			/			/
	月 日~		月 日~						/			/			/			/
	月 日~		月 日~						/			/			/			/
	月 日~		月 日~						/			/			/			/
施 肥 記 録						その他			/			/			/			/
散布日	肥料名	保証成分	10a当施用量						/			/			/			/
/			Kg						/			/			/			/
/			Kg						/			/			/			/
/			Kg						/			/			/			/
/			Kg						/			/			/			/
/			Kg						/			/			/			/
/			Kg						/			/			/			/
/			Kg						/			/			/			/
/			Kg						/			/			/			/
以上の栽培履歴であることを誓約いたします。						氏名	印					確認印	/	/	/			

手
リ
ト
リ
セ
ン

残留農薬ポジティブリスト制対応 農薬飛散対策チェックシート

氏 名	コードNO	圃場番号

【農薬飛散防止対策のために】

チェック項目	チェック V	対 策
1 立地条件・散布条件の確認！		
周りは他の作物を栽培している圃場ですか？		→作物や収穫日を確認
近くに貯水池や川などの水系はありませんか？		→散布方向や風向きに気をつける
風の強さはどうですか？		→風が強いときは散布しない
2 近接作物の確認！		
隣接した圃場に収穫間近の他の作物はありませんか？		→散布日を変える等調整する
遮へいシート・ネットなどは使っていますか？		→きちっと張られているか確認
3 散布器具の確認！		
散布器具のノズルは飛散低減タイプですか？		→作物に合わせて選ぶ
散布圧力や風量は調整しましたか？		→圧力を上げすぎず、風量は絞る
4 散布方法の確認！		
調整した散布液は適切な量ですか？		→必要以上の散布は避ける
作物のない方向に散布はしていませんか？		→ノズルの方向に注意する
散布器具は作物に近づけて散布していますか？		→できるだけ作物に近づける

【農薬適正使用のために】

チェック項目	チェック V	対 策
散布する作物は農薬ラベルの適用作物に入っていますか？		適用のない作物には使用しない
農薬の定められた使用方法を守っていますか？		使用量・希釈倍数・使用時期・成分ごとの総使用回数は必ず守る
使用する予定の防除機・器具に不具合はありませんか？		日ごろの管理を徹底し、使用後は洗浄をする
農薬に触れた手で収穫物を扱っていませんか？		農薬を使ったあとは、手を洗う
散布記録を残しましたか？		圃場・作物ごとに散布月日・農薬名・散布濃度・散布量を必ず記録する

飛散による事故を防止し、安全・安心な農産物を生産していくために、農薬の使用方法を守るとともに、これまで以上に飛散防止対策に努めました。